

小浜・福井城下町の呪的都市プランニング

岡 颯馬

(佐々木 高弘ゼミ)

I 小浜城下町の呪的都市プランニング

- (1) 小浜城下町の怪異
- (2) 異種混合な関係性の地理学
- (3) 平安京の神話的世界観
- (4) 小浜城下町の呪的都市プランニング
- (5) 伊吹山山麓の武士団
- (6) 動員される異種混合なアクターたち

II 福井城下町の呪的都市プランニング

- (1) 福井城下町の怪異
- (2) 福井城下町の呪的都市プランニング
- (3) 首なしの意味論
- (4) 「排除」される柴田勝家公

III 結論

I 小浜城下町の呪的都市プランニング

(1) 小浜城下町の怪異

明和元年に成立したとされる若狭地方の地誌である『拾椎雑話』には、小浜城下町において怪異を目撃した人々の語りが多数記録されている。

例えば、次にあげる怪異譚もそのうちのひとつである。

組屋六郎左衛門に伝ひ候疱瘡神の事は、永禄年中に組屋手船北國より上りし時、老人便せんいたし来り、六郎左衛門方に着、しばらく止宿いにて発足の時、我は疱瘡神也、此度の恩謝に組屋六郎左衛門とだに聞は疱瘡安く守るへし。とちかひて去ぬ。六郎左衛門其時の姿模様を書にうつし留し也。今有所の物かくの如し。寛延年中京大阪にて開帳あり⁽¹⁾。

さて、この怪異譚に登場する組屋六郎左衛門家とは、江戸時代小浜町の筆頭に位置し、代々瀬木町に住み、六郎左衛門を名乗った家系である。この組屋家は、豊臣政権の米を津軽で受け取り、そ

の販売と運送を行い、秀吉の朝鮮出兵に際して、米糧を朝鮮への前線基地であった肥前名護屋への運送や小浜の町奉行と町年寄を兼ねるような地位にいたことが指摘されている⁽²⁾。

また、組屋家が上記の怪異譚にちなんで疱瘡神の姿を写した札を疱瘡除として販売していたことが寛文年間成立の『若狭国伝記』に記録されている⁽³⁾。



図1 組屋六郎左衛門家跡瀬木町（岡撮影）



図2 本境寺組屋六郎左衛門家の墓（岡撮影）

また『拾椎雑話』には、次のような怪異譚も記録されている。

吹田惣左衛門法名宗碩、五七歳の時疱瘡いたし、神に膳を居置ける、備へたる小鯛を猫がくはへ去る時に、惣左衛門夢中に大に叫びて

やれ痛いといふ。家内驚きて猫をとらえ小鯛を取戻しければ、もとのことく安く寝入りけると也⁽⁴⁾。

上記の怪異譚に登場する吹田家は、『拾椎雑話』によると上小路に住んでいたとされている。

さて、この『拾椎雑話』であるが、町人学者の木崎愷窓が宝暦七年から町内・領内を巡回し、古老から聞き取りするなどして、7年後に完成させた若狭地方の地誌である⁽⁵⁾。

全28巻からなりその内容は、町人の職業や町年寄、米値段、祭礼、鍛冶、市場、遊芸、寺社の由緒、武家などの社会的な事柄だけでなく、天候、災害、疫病、鳥獣、植物などの自然物に関する情報も多く掲載されている。

内容の大部分は小浜が中心であるが、「郷中」の項目には小浜以外の若狭国内の諸事が記されており、また他国の諸事を書き上げた「他邦」の項目、公家や源頼朝などの武家のことが記された「高貴」の項目も他国の事柄が多くを占めている。「異域」の項目には外国のことなども記されており、江戸時代の若狭地方を知るうえで重要な史料であるといえるだろう。

こうした多種多様な事柄を掲載している『拾椎雑話』には、先述の通り怪異譚のような怪しげな話も記録されている。

そうした怪異譚を「現実にはあり得ないと思われるような不思議な事柄。また、そのさま。あや

しいこと⁽⁶⁾。」という広義の意味での怪異の定義を基準に抽出したものが、表1（本論文の最後に掲載）となっている。

このような作業を経てみると、興味深いことに気がつく。

1点目は、抽出した40事例のうち30事例が小浜城下町内であること。

2点目は、怪異譚の多くには特定の場所、特定の人物、特定の時代といった具体的な情報が伴っていることである。

とりわけ特定の場所といった空間情報は、筆者が専門とする人文地理学において、本論が対象とする怪異譚をも含むイメージの研究の足掛かりとなりうるものであるといえる。

そこで本論では『拾椎雑話』に掲載される怪異譚のなかで、小浜城下町内において怪異が目撃された場所および関連する人物らが居住していた場所を地図化した。図化したものが図5である。

このようにして怪異譚の記述から空間情報を抜き出し、地図化により視覚化することで、その場所が小浜城南西の地域に偏っていることが確認できる。

では具体的な話に入る前に、まず小浜城下町の空間構造を確認しておきたい。

本論で対象とする小浜は古代より日本海側の玄関口としての役割を担っていた土地である。平野中央部に古代の若狭国府が置かれ、この場所を中心に律令支配が行われていたと考えられている。中世以降は主に武田氏が後瀬山に城を構え、関ヶ



図3 瘡瘡御守札

(大島建彦「組屋の『瘡瘡守略縁起』』『西郊民俗』(139号)西郊民俗談話会、1992、26頁)

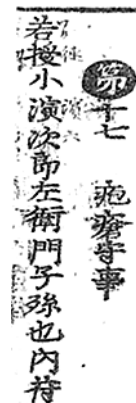


図4 『諸大事類蔵』

(高野山大学図書館寄託高野山宝城院 2108.12.2 京都先端科学大学講演会鍛冶宏介氏配布資料より)

原以後京極氏・酒井氏が入国し近世の小浜城下町の整備を行った⁽⁷⁾。

近世小浜城下町の町割りは、小浜城南西の中世以来の町割りと町人・寺社が立ち並ぶ比較的古い区画である小浜町と関ヶ原の戦い以降に京極氏により整備された比較的新しい区画西津・竹原武家屋敷に分けられる⁽⁸⁾。

このような小浜城下町の空間構造のなかで、怪異譚における場所が偏るのが小浜城南西に位置する小浜町となっているのである。

こうした傾向が指し示すのは、小浜城下町において目撃された怪異が、ある特定の個人の幻想というよりも、小浜城下町に居住する集団の幻想であるということであろう。

それは『拾権雑話』という史料の性格からもうかがうことができる。

なぜならば、上記のような怪異を目撃した人物らは、現代においては精神病的な処置を受けることとなるだろう。しかし、人が正常か否かを判断する基準は当該社会の価値判断に依存する。

すなわち、『拾権雑話』は地誌というある程度公開された史料であり、上記の怪異譚は特定の文化集団にある程度受容されていたということになる。

であるならば、こうした怪異譚が語られた原因を個人というレベルから特定の文化集団というレベルへと昇華させる必要があるといえるだろう。



図5 小浜城下町の怪異空間
(天保2年小浜城下町全図堀河健司蔵に岡加筆)

(2) 異種混合な関係性の地理学

前節では、小浜城下町における怪異譚の主体をひとまず個人から文化集団というレベルに置き換える必要性を論じた。それは具体的には、小浜城下町における特定の文化集団である都市民を指すこととなる。

こうした都市民と怪異について早くから言及していたのが民俗学者の宮田登であった。

例えば宮田は、都市において怪異が多発する「魔所」をあげ、神霊が集中しやすい場所が開発などで破壊されたとき、人間に対する警告として怪異が生じる。そのように考えるのが都市民の想像力などであるとした⁽⁹⁾。

筆者が専門とする人文地理学においてはどうかであろうか。

人文地理学とは、人間と空間・場所の関係性を研究する学問分野である。

例えば、初期の人文地理学では、人間が環境に対して受動的であるという環境決定論、それに対立する形で提唱された人間は環境を乗り越えることができる能動的なものであるとする可能論などが提唱された。

1950年代中頃から60年初頭代にかけては、統計学・数理学の手法を用いて計量的に分析し、一般化や構造化を図る地理学が主流となった。

そうした計量的な地理学の批判として、60年代後半から登場したのがイーファー・トゥアンらを中心とする人文主義地理学のアプローチであった⁽¹⁰⁾。

人文主義地理学では、「主体からみた空間」が重視され、①主体によって経験された空間「生かされる空間」の呈示、②主体にとっての意味や価値を包含した「場所」の呈示、③過去および想像上の景観や場所の復元とそれに賦与された意味の解読、④①～③の成果を、アメニティー豊かな景観づくりに応用することが研究目的としてあげられた⁽¹¹⁾。

こうした学問上の流れのなかで本論が研究対象とする怪異譚は、人間を研究の中心に据えた人文主義地理学によって捉えられてきた⁽¹²⁾。

しかしながら、近年浮上してきたポスト構造主義地理学では、人間が研究の中心から外され、人間／非人間が混ざりあう異種混合な関係性のなかの相互作用としてあらゆるものが理解される⁽¹³⁾。

そこでは、閉じられた固定的な空間概念は否定され、空間は開かれており、他の空間や場所とネットワークで繋がり、常に流動的に変化しているものとして捉えられる⁽¹⁴⁾。

実は、こうした新たな地理学の登場の背景には、ブルーノ・ラトゥールらのアクターネットワーク理論があった⁽¹⁵⁾。

ラトゥールはアクターネットワーク理論のなかで、二つの実践が「近代」を形成していることを指摘する。一つ目の実践は「翻訳」である。「翻訳」とは例えば、オゾン層の破壊などの大気上層の化学作用を、化学産業の戦略、国家首脳の心痛、生体論者の気がかり等に結びつけるなど、自然と文化があらゆるものと結びつき混ぜ合わされハイブリッドが形成されるという、ネットワークのプロセスである。二つ目の実践は、「純化」である。「純化」では、「翻訳」で結びついた現象を近代論者の手により人間／非人間あるいは自然／社会／言説などに分断される。「翻訳」で起こった自然と文化が結びつき形成された一次元的なものを、近代論者が理解することで「自然」「社会」「言説」などに切り分けることこそが「近代」であり、「翻訳」のプロセスのみが存在する状態こそ「前近代」であるのだとする。そして、「近代」においては、「翻訳」で生まれたハイブリッドが「純化」の作用により、水面下へと押しやられていると、ラトゥールは言う⁽¹⁶⁾。

それだけでない。彼は続けて、このアクターネットワーク理論の射程が過去および未来においても有効であることを示唆する。

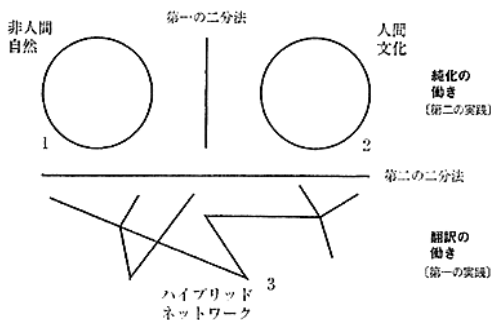


図6 アクターネットワーク理論模式図
(ブルーノ・ラトゥール、川村久美子訳
『虚構の近代』新評論、2008、27頁)

こうしたラトゥールらの研究に触発され、英語圏の人文地理学における都市研究にもポスト構造主義地理学の影響が見られるようになってきている。

例えば、J・Murdoc は都市プランニングを①自然的な実在②社会的な実在③異種混合の実在、を取り込んだ三つの段階に区分する⁽¹⁷⁾。もちろん彼のいう異種混合な実在とは、ラトゥールが示した人間／非人間、自然／社会／言説を包含したものである。

日本の都市研究ではどうであろうか。

例えば、本論が対象とする近世城下町は、歴史地理学においては藤岡謙二郎が現代都市の基礎として近世城下町を位置付けて以降、研究対象とされてきた⁽¹⁸⁾。

以降、矢守一彦が「都市プラン」「城下町プラン⁽¹⁹⁾」の語を用いて城下町を戦国期型・総郭型・内町外町型・郭内専士型・開放型の5つに類型化した⁽²⁰⁾。

矢守以降は、おおむね5つの類型に基づいた城下町の復原・変遷の研究が行われてきた傾向にある⁽²¹⁾。

これを踏まえ、問題となるのは日本の歴史地理学において城下町の社会・自然を対象とした研究はなされてきたが、特に言説をも含む「異種混合な実在」を想定した研究が乏しいという現状であろう。

また、武藤直が指摘するように近世城下町の研究は、個別の城下町への関心が強く、個性記述的な地理学的伝統から抜け出せていないとされる⁽²²⁾。それはポスト構造主義地理学が提示する「多数の関係性からなる開かれた空間」とも相反するものとなろう。

さて、こうしたアクターネットワーク理論とその影響を多分に受けたポスト構造主義地理学の議論に耳を傾けるのであれば、本論が対象とする怪異譚も、もはや特定の文化集団というレベルではなく、こうした「異種混合な実在」を含む関係性という枠組みのなかで理解されるべきであろう。

それは、従来の城下町研究のように社会的なものに重点を置くのでもなく、かつ個性記述的になるのでもない、新たな視点の提示となるだろう。

以上のことから本論では、城下町という都市空間を「異種混合な実在」を取り込んだ「多様な関係性からなる開かれた空間」として捉える。また、そこで語られる怪異譚も異種混合な実在が混合する関係性のなかの相互作用として理解する。

(3) 平安京の神話的世界観

前節でふれたように、ポスト構造主義地理学という新しく浮上した地理学において、空間は「多様な関係性からなる開かれたもの」として理解される。

であるならば、先に触れた怪異譚も小浜城下町内のみならず、外部から発せられていると、考えてもよいのかもしれない。

さて、組屋六郎左衛門家、吹田惣左衛門家の両家の話に共通するのは、疫神を歓待することでその災厄から逃れる発想であった。

実は、類似の話が京都八坂神社の社伝『祇園牛頭天王縁起』にみられるのである。

須弥山の中腹に豊饒国という国があった。その国に、牛頭天王という牛の頭をして赤い角のある王子がいた。ところが、この姿を恐れて誰も后になってくれない。気晴らしに狩に出たある時、山鳩が来て言った。龍宮の八海龍王の三女を嫁に定めよと。喜んだ牛頭天王は、龍宮へ行くことにする。途中日が暮れたので宿を探し、古単将来という長者の家を訪ねるが断られる。怒った牛頭天王は古単を蹴殺そうとするが、嫁取りという祝いの前なので我慢する。そして、蘇民将来の家を訪ねる。するとその家は貧乏であったが、快くもてなしてくれた。喜んだ牛頭天王は、蘇民に宝物の牛玉を与える。そして龍宮を訪問し、姫の内裏を訪ねる。八年過ごし、八人の王子を産み本国に帰る途中、蘇民の家を訪問する。牛玉のお陰で家は立派になっている。次に古単の家を訪問する。すると古単の家では、相師を招いて占いをを行っている。相師は言う。牛頭天王が、三日以内に古単将来をはじめ家来を蹴殺しに来ると。古単は、相師の助言で千人の大徳の法師を招き、大般若経を七日間昼夜とわず読経して、この難を逃れようとした。すると六百巻の大般若経が高さ四十丈、六重の鉄の築地となり、箱は上の蓋となっていた。牛頭天王が眷属に探查させると、一人の法師が居眠りをしていたためにできた隙間があった。そこで牛頭天王の家来たちは、その窓から走り入り、古単の一族郎党をことごとく蹴殺したのだった。その際、蘇民は、正しい心を

持つ古単の娘一人を助けてくれるように頼む。牛頭天王は赤い絹でつつんだ茅萱の輪と蘇民将来の子孫なりと記した札を持っていれば難を逃れることができると教え、この娘一人だけが助かる。このようにして今でも牛頭天王と八王子は、古単の一族を罰し、蘇民の一族を擁護しているのだ。であるから人々は牛頭天王を信仰し、守ってもらうべきなのだ⁽²³⁾。

ここでは荒ぶる神である牛頭天王を邪険に扱った古単将来は蹴殺され、快く饗応した蘇民将来は宝物の牛玉を賜り家が栄えた。そして蘇民将来は、正しい心を持つ古単の娘一人を助けてくれるように頼み、茅萱の輪と蘇民将来の子孫なりと記した札を持っていれば難を逃れることができると知り、娘は助かる。

実は、この話が京都を代表する夏季の祭礼である祇園祭に繋がっているのである。現在でも氏子の人々は茅萱の輪と蘇民将来の子孫なりと記した札を軒先へと飾り、荒ぶる神牛頭天王を祭りもてなすことでその年の平穏を願う。

この祇園祭は、本来は祇園御霊会と称される祭礼で、夏季の疫病や水害、干ばつなどの災厄を政争で死んでいった者たちの怨霊によるものだと考え、それらを山車や囃子などで慰撫鎮送しようとするものであった⁽²⁴⁾。

組屋六郎左衛門家、吹田惣左衛門家の怪異譚と『祇園牛頭天王縁起』は、疫神を接待し、その災厄から逃れる発想が共通している。また、蘇民将来の子孫を示す札と疱瘡御守札なども類似しているといえるだろう。

実はこのような疫神や鬼を接待し、災厄から逃れるといった発想は律令国家が編纂した『令義解』にもみることができる。

『令義解』「神祇令」には「京城ノ四隅ノ道ノ上ニ之ヲ祭ル。言鬼魅の外自来…敢テ京師二入ラ不。故二預メニ於饗シ過ル也」とある⁽²⁵⁾。

この記述は、根の国底の国より道を伝いやって来る鬼・疫神を京城四隅（逢坂堺・和爾堺・大枝堺・山崎堺）で饗応し、侵入を阻止する祭である道饗祭を示すものである。

祝詞によると大八衝にいる神の八衢比古・八衢比売・久那斗に幣帛をたくさん奉り、八衝で岩の

ように塞ぎ、鬼魅の侵入を阻止するとある⁽²⁶⁾。
さらにこの道饗祭では、素戔鳴尊や牛頭天王、地蔵も祀られたともされる⁽²⁷⁾。

『不動利益縁起絵巻』は、三井寺の高僧が重い病気にかかり、安倍晴明が泰山府君の祭を行う場面を描いているが、その舞台となったのは三井寺であり、逢坂堺にほど近い場所であったことから道饗祭の一場面であったのではないかと指摘もある⁽²⁸⁾。



図7 不動利益縁起絵巻
(南北朝時代・14世紀、東京国立博物館蔵)

では疫病の原因となる鬼や疫神たちはどこからやってくるとされたのだろうか。

『延喜式』「陰陽寮」饗祭料には、「東方陸奥。西方遠値嘉。南方土佐。北方佐渡…奈牟多

知疫鬼之住加登定賜⁽²⁹⁾」とあり、律令国家が日本列島の四方に根の国底の国を想定していたことがわかる。

すなわち、日本列島の四方に設定された根の国底の国から道を伝い、天皇のいる内裏を目指してくる鬼や疫神を京城の四隅で饗応し、再びお帰りいただくための祭りが先ほどの道饗祭であったのである。

この道饗祭は、諸国においても行われたようで、『続日本紀』天平7年の条には「乙未、勅して曰はく、如聞らく、此日大宰府に疫に死ぬる者多しときく。(中略)幣を彼部の神祇に奉り、民の為に禱み祈らしむ。また、府の大寺と別国の諸寺とをして、金剛般若経を讀ましむ。仍て使を遣して疫民に賑給し、併せて湯薬を加へしむ。また、その長門より以遷の諸国の守、若しくは介、専ら齋戒し、道饗祭を祀る⁽³⁰⁾。」とある。

それだけでない。律令国家は平安京の南門である羅城門・朱雀門・建礼門においても有事の際に大祓を行い、鬼魅の侵入を阻止した⁽³¹⁾。

例えば、『日本三代実録』には「於二御在所及建礼門。朱雀門一。修二大祓事一。以攘二災疫一也⁽³²⁾。」(貞観五年正月二十七日庚寅条)や「地震。大二祓於建礼門前一⁽³³⁾。」(貞観十四年九月三十日丁酉条)とある。

この羅城門・朱雀門・建礼門は鬼魅を祓い流す場所であると同時に鬼魅が集まってくる場所でもあった。

例えば、『平家物語』には次のような話が掲載されている。

近衛院御在位のときに、近衛天皇が夜な夜な怯えられるという出来事があった。高僧に命じて秘法を行わせたが、効き目がない。丑の刻頃に、東三条の森の方から一叢の黒雲が湧き上がり、御殿の上を覆うと、必ず怯えられるのだった。そこで、武士に命じて警護をさせようと、源頼政が選び出された。

頼政は、浅葱の狩衣に山鳥の尾を矧いで作った矢を二筋持ち、深く信頼している郎等である遠江国の住人、猪早太に黒母衣の矢を背負わせ、ただ一人連れてきた。夜ふけ、日頃人々が言うに違わず、東三条の森の方から黒雲が出てきて、御殿の上に五丈ばかりたなびいた。雲の中には、怪しい物の姿があった。

頼政「これを射損じるものならば、世にあるべき身ともおぼえず。南無帰命頂礼、八幡大菩薩」と心に念じて、矢を放った。手ごたえがあり、南の小庭に落ちた。猪早太が近づき、落ちたところを取り押さえ、五回刀を突き刺した。そのとき内裏の上下の人々が火を燃やしてこれを見ると、頭は猿、体は狸、尾は蛇、手足は虎の姿で、鳴き声はぬえに似ていた。近衛天皇は感動のあまりに、獅子王という剣を頼政に与えた。そして、この妖怪変化はうつろ舟に入れて流されたという⁽³⁴⁾。

大内裏鬼門の一条戻り橋周辺も本来は大祓の場であったとの指摘がなされており、安倍晴明・源頼光といった怪異に対応する人物らが配置されていた⁽³⁵⁾。

『平家物語・剣の巻』には、一条戻り橋における怪異の話が収録されている。

源頼光の郎党であった渡辺源四郎綱が使者として一条大宮に遣わされる。夜も更けていたので馬に乗り、「おそろしき世の中なれば」と鬚切を帯刀させられる。やがて、一条堀川の戻橋を通ると美女と出会う。美女が「夜ふけ、おそろしきに、送り給ひなんや」と言ったので馬に乗せ、堀川の東を南に行く。すると、女は途中で自分の住むところは都の外にあり送ってくれるかと問う。「送りましょう」と綱が答えると、「わが行く所は愛宕山ぞ」と綱の髻を掴み、乾の方角へと飛んでいく。綱は少しも慌てず、鬚切で鬼の腕を切り落とし、北野の社の回廊の上へと落ちる。綱が切り落とした鬼の腕を持ち帰ると、頼光は驚き、播磨にいた清明を呼び占わせると「綱には七日のいとま賜はつて、仁王経を講読すべし」と言う。

六日目の晩に綱の養母である伯母が渡辺より上京し、訪ねてきた。物忌の途中であると一度は断るが、泣きだすので、屋敷に伯母を入れてしまう。物忌の理由を問われ、綱がありのままを話すと、伯母は「話の種に」と、鬼の手を見たがる。

鬼の手を見せると、伯母は「これはわが手ぞや」と言い、鬼となり破風を蹴破って去っていった。それより渡辺党は家に破風をたてない。また、鬚切も鬼を切ったため「鬼丸」と改称した⁽³⁶⁾。

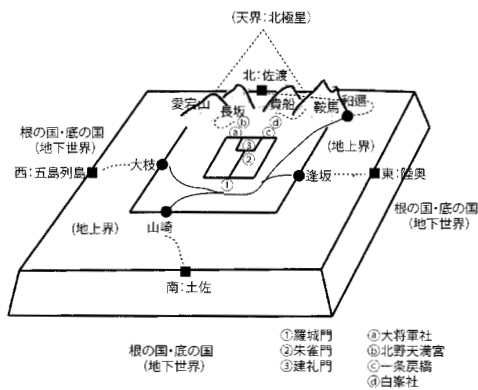


図8 平安京の神話的世界観と疫病の神の循環
(佐々木高弘『神話の風景』古今書院、2014、207頁)

こうして大祓により祓われ、流されていった鬼たちは河川に沿って南下していった。

その流域沿いには、鬼たちを見張るための役割を担った武士団が存在していた。

それは渡辺党と呼ばれる武士団で、さきに紹介した『平家物語・剣の巻』で鬼を斬った渡辺綱を祖とする人々であった。

歴史学者の三浦圭一がまとめるところによると、①御厨経営に関連していた、②牧務・牧司となり馬の私的所有や交易による蓄財で武士団を形成、③渡辺を本貫とし、津・港湾と切り離せず、海陸にわたって極めて機動力に富んだ武士団、水軍として源平争乱期にも活躍、④荘園の荘官として活躍するものも多数いたとされる⁽³⁷⁾。

三浦が指摘するように、渡辺党は摂津国渡辺(現在の大阪市天神橋と天満橋の間)を本貫としていた。

この場所は渡辺津とも呼ばれ、七瀬祓の祭場である農太と場所的に重なり、平安京で祓われたすべてのケガレが難波の海に流れ込むのを見届ける重要地点であったとされる⁽³⁸⁾。

また、付近にある坐摩神社の官司も代々渡辺党が務めていた。

それだけでなく、渡辺党の多くは先にふれた道饗祭に関与していたことが指摘されている⁽³⁹⁾。

さらに11世紀ごろから清涼殿東庭北東御溝水の落ち口付近、すなわち清涼殿の鬼門を詰所とする「滝口の武士」として頻出する⁽⁴⁰⁾。

このようにしてみるのであれば、彼らが呪的な意味合いを帯びた武士団であったことが分かるかと思う。

実は、先述の『平家物語』で鶴を退治した源頼政の郎党にもこの渡辺党の名がみえることが指摘されている⁽⁴¹⁾。

他方で、彼らは左衛門尉や右衛門尉といった官職も務めており、検非違使として渡辺の地に駐在し、警察権を握っていたともされる⁽⁴²⁾。

さて、このようにして流された鬼は、いったいどこへと向かっていったのであろうか。

歴史地理学者の佐々木高弘は、道饗祭と大祓の祝詞を比較し、次のように述べる。

「この大祓の祝詞では、都で生じた罪や災厄を、水流に沿って「根の国・底の国」へと流している。

ところが道饗祭の祝詞では、その罪や災厄の終着点である「根の国・底の国」から、街道を伝って荒ぶる神たちが都を目指して侵攻してくるのである。つまり、流したはずの私たちの数々の罪や災厄を、荒ぶる神々、つまり鬼や妖怪たちが再生所持し、道を伝って再び都へ戻ってくる…⁽⁴³⁾

すなわち、平安京には大祓で祓われた罪・穢れが、再び街道を伝い都へと侵攻してくる鬼や疫神として戻ってくるという循環的な神話的世界観がみうけられるというのである。

そして、佐々木はこうした循環的な神話的世界観について次のようにも言う。

「この空想世界を平安京の实在空間に当てはめると、もう一つの疫病や神や鬼たちの出没地が見えてくる。平安時代になると、天界を北極星だと見なした。だから藤原京で都城の中央にあった内裏が、その後北に移動する。であるなら平安京の北の山々に、天界が想定されることになる。そして、この循環思想が有効であったのなら、鬼たちは北から水流に乗って、平安京を目指すことになる⁽⁴⁴⁾。」

さて、こうした平安京の神話的世界観において押さえておきたいのは、怪異譚という表象、大祓や道饗祭が行われる場所、渡辺綱をはじめとする怪異に対応する人々の身体が空間において一致し

ている点である。

近年の人文地理学では、身体は空間の物質的要素であるとともに時空間における実践の拠点であり、表現行為とともにあるとされる⁽⁴⁵⁾。

であるならば、平安京においてもこうした表象－実践－身体－空間の連関を描くことができるのではないだろうか。



図10 渡辺津（岡撮影）



図11 旧坐摩神社跡地（岡撮影）



図9 歌川国芳『瀧口内舎人渡辺綱』（怪異・妖怪画像データベース 2019.11.23 閲覧）

(4) 小浜城下町の呪的都市プランニング

再び小浜城下町へと話題を戻そう。

怪異の本場である平安京では、根の国・底の国からやって来る鬼や疫神といった存在とそのような魔から秩序を守るために大祓や道饗祭が実践された。

そうした実践の場には、怪異に対応する人々とそれに関連する怪異譚が残存していた。

佐々木はこうした平安京の神話的世界観が、東山道と中山道が合流する交通路の要衝に位置する名古屋城下町においても空間化されており、その

境界部には渡辺姓が確認できることを指摘する⁽⁴⁶⁾。

小浜城下町はどうであろうか。

先に触れた組屋家や吹田家の語る怪異譚にある疫神を接待し、その災厄から逃れる発想は平安京の神話的世界観にも見いだすことができる。

すなわちそれは、律令国家が有したある種の知識が近世城下町でも共有されているとも換言できるだろう。

であるならば、名古屋城下町と同じく小浜城下町にも平安京の神話的世界観が空間化されており、冒頭でふれた怪異譚もその空間の配置に対応する形で語られていたということが想定できないだろうか。

実は、『拾椎雑話』に記録される怪異譚が集中した小浜町の区画は、近世小浜城下町の主要交通路であった丹後街道と若狭街道とが合流する極めて重要な地点であった。

それは平安京でいうならば、各地方に張り巡らされた交通路が羅城門で集合し、大内裏へと続く朱雀大路に相当する場所であったといえる。

呪的な防御という側面はどうであろうか。

若狭街道が通り抜ける小浜町の出入口に位置する八幡宮（現在は八幡神社）が鎮座するが、聞き取り調査によると八幡宮の史料に天正2年より渡辺左近長良の名がみえるという⁽⁴⁷⁾。

さらに、八幡宮渡辺家の分家に当たる闇見神社渡辺家の渡辺義幸氏によると、八幡宮渡辺家の系図には天正年間以前の記述がなく、それ以前は不明であるという。家紋が三ツ星一文字の渡辺星で

あることから当家では、渡辺綱に連なる家系であると伝承しているという⁽⁴⁸⁾。

すなわち、小浜城下町の主要交通路である丹後街道と若狭街道が結びつく、交通路上極めて重要な結節点において、平安京の呪的防御に関与していた渡辺党の存在が浮かび上がるのである。

『拾椎雑話』には、この八幡宮社家の渡辺氏と疫神の怪異譚を語る組屋六郎左衛門家が接触していたことを示す記事が収録されている。

正月十三日八幡にて市祭の能有。其前晚西宮前町たはこや三右衛門家にある木造のゑひすを見せに出しかさり置、諸人参拜致し候。八幡宮にて式三番有間は宮の拝殿にもち出す。此木像慶長・寛永の頃市場に有し也。古来より組屋六郎左衛門御酒・洗米をそなへ来り、今以かわる事なし。其始詳か成をしらす⁽⁴⁹⁾。

上記の記事では、八幡宮の市祭で飾られるえびす像に古来より神酒・洗米を供えていたのが組屋



図12 八幡宮渡辺家系図（写本）



図13 八幡宮（岡撮影）



図14 庚申堂（岡撮影）

小浜・福井城下町の呪的都市プランニング

六郎左衛門家であったとある。また、八幡宮は江戸時代には町人を氏子としており、怪異を語った人物らと渡辺氏との間で何らかの接触があったことは想像に難くないだろう。

八幡宮とは別に交通路が通る小浜町の大木戸付近には、庚申堂が鎮座している。

この庚申も記紀神話において衢の神とされる猿田彦神と同一視される神であり⁽⁵⁰⁾、境界部を呪的に防御していたと考えられよう。

他の境界部はどうであろうか。

正保2年成立の若狭敦賀之絵図をみると、小浜城下町へと繋がる海路・陸路を含む交通路が描かれている。

そして、その境界部には平安京の呪的防御に関連するアクターの姿を確認することができるのである。

まず、南方の竹原武家屋敷周辺には大手門が配置されるが、程近くの場合に天王社・天神社（現広峯神社）が鎮座している。

既にふれたように祭神である牛頭天王は道饗祭や祇園御霊会においても祀られた荒ぶる神である。

また、「小浜祇園祭礼絵巻」（江戸時代後期 廣峰神社所蔵）には、天王社祭礼の祇園会の行列のなかに、渡辺党の家紋が見られることが指摘される⁽⁵¹⁾。

次に、西津武家屋敷と足軽の居住する区域の境界には玉津島神社が配される。

社伝によれば、「久安五年二月五条三位藤原俊成卿が諸国遊覧の際に当所を通行された。其の時ひとりの老翁が案内されて猿田彦神を祀った一小社のある勝景の地に到ったところ、老翁は衢の神であることを告げていづくともなく去って行かれた。俊成卿は感悦して暫く逗留され、玉津島御神影と御和歌をこの社に納めて、玉津島明神を祀り崇敬された。その後、寛治二年秋ごろ、庄官が村内の疫病平癒の祈願とされたところ、その夜東帯の老翁と美しい女性が庄官の枕元に立たれた。そのとき神告を得て、津田の辺にこの社を移し奉ったところ疫病の憂いなくなった⁽⁵²⁾。」とあり、道饗祭でも祀られた衢の神を配置されていることがわかる。

その玉津島神社に隣接し、小浜城北東鬼門の角に鎮座する釣姫神社は、地元の伝承では、祭神は源頼政の娘二条院讃岐とされる⁽⁵³⁾。



図15 天王社（岡撮影）



図16 「小浜祇園祭礼絵巻」に描かれる渡辺星
（『うきたつ人々～幕末若狭の祭礼・風俗・世相～』
福井県立若狭歴史博物館、2018、38頁）

源頼政は鶴退治を行った伝承を持つ人物であり、その郎党には渡辺党がいたことは既にふれたかと思う。その頼政に関連する人物が衢の神に隣接する形で小浜城下町の境界部に配置されているのは、極めて象徴的であるといえるだろう。

小浜城下町の境界部に位置する場所には、山王神社（現在は日吉神社）が鎮座する。

山王信仰は比叡山東麓の日吉社を源流とするとされ⁽⁵⁴⁾、平安京においても鬼門にある赤山禅院・比叡山を呪的に防御した重要なアクターであったといえる。

この日吉神社の境内社の祭神には、猿田彦命と天ノ受須売命、崇徳天皇が祀られており⁽⁵⁵⁾、衢の神と荒ぶる神がここにも配置されているといえるだろう。

さらに、怪異譚の集中する小浜町の河口部には、六月祓神社が鎮座する。

六月祓神社は、地元では川濯さんと呼ばれ、北海道・兵庫県・岡山県・鳥取県・京都府・滋賀県・福井県・石川県の河川に分布し、祓戸大神が旧暦六月晦日の大祓神事から分離して、冬期に地域の女性達が川下、川裾、川濯祭として祀るようになったとの指摘がなされている信仰である⁽⁵⁶⁾。

また、小浜城の北東、つまり鬼門の方角にある西津武家屋敷に目を向けると、渡辺氏と相撲部屋が隣り合い配置されているのが確認できる。

享保3年成立の小浜城武家屋敷図には、西津武家屋敷に渡辺氏の名は見えず、享保3年以降に移住してきたとみられる。

相撲取も平安京においては、清涼殿鬼門を守護した滝口と関連していたことが指摘されている⁽⁵⁷⁾。

それだけでなく、小浜城跡には京極忠高が召し抱えていた相撲取が身体を洗ったと伝わる井戸跡があり、小浜藩との密接な関係も窺える。

また、『拾椎雑話』『稚狭考』には、八幡宮に相撲が奉納された記事が収録されている。

『拾椎雑話』

八幡宮の事〔郡縣志〕に詳也、天正の棟札より今既に百五十年、宮殿破損に及ぶ。氏子中地形を築、石壇を積かさね、宮殿拝殿を造替成就す、時に寛保三年癸亥八月正遷宮有り。古来より小濱祇園祭を第一として、放生會には氏子家業を勤め、何れのもてなしもなく、□末のことなりしを、此時より惣町中申合、相改め、十四日、十五日家々すたれをおろし家業を休み、両夕神燈社地は申に及はず町毎にさゝけずと云事なし。十四日相撲は以前夜有しを今年より晝にて大仰に也、能は例格のことし⁽⁵⁸⁾。

『稚狭考』

年のくれのわさは、寛永・正徳の頃も大年の前一日に調べて、大年は隙にてありしとぞ。七月十二日も此如ありしを、享保の初より十三日にかゝり、元文之頃より十四日晝夜に及び、今は十四日夜暁にも及ぶ。すてに享保



図 17 玉津島神社 (岡撮影)



図 18 釣姫神社 (岡撮影)



図 19 山王神社 (岡撮影)



図 20 六月祓神社 (岡撮影)



図 21 小浜城跡地にある相撲取が身体を清めたとされる井戸 (岡撮影)

小浜・福井城下町の呪的都市プランニング

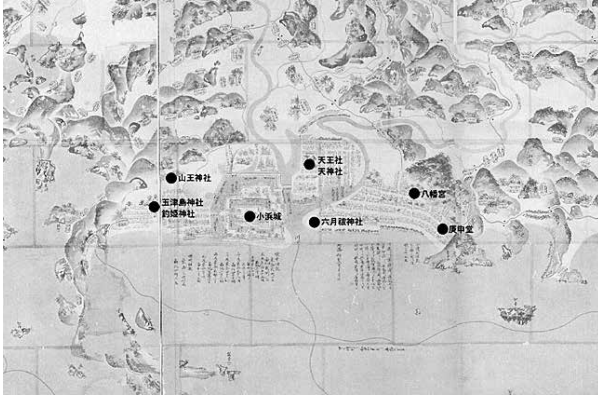


図22 若狭敦賀之絵図 正保2年成立(岡加筆)



図23 小浜城下町の呪的都市プランニング
(天保2年小浜城下町全図堀河健司蔵に岡加筆)

十四年の七月十四日、八幡宮の社内にて相撲を試みられし、其頃も十四日朝のう内までの取やりも至極はちしのひけるなり⁽⁵⁹⁾。

これらの記事から、八幡宮渡辺家と相撲取の間にも接触があったことが窺えるだろう。

では、この近世小浜城下町に空間化された平安京的な呪的都市プランニングをどのように解せばよいだろうか。

そこで参照したいのが、M・フーコーの「一望監視施設」における権力と空間に関する議論である⁽⁶⁰⁾。

フーコーのいう一望監視施設とは、ジェレミ・ベンサムによって設計された監獄の構想を指す。

一望監視施設では、周囲に円環状の建物、中心には塔が配され、塔には建物の内側に面して大きい窓がいくつもつけられる。周囲の建物は、独房となっており、それぞれが建物の奥行をそっくりと占める。独房には内側と外側に面した窓が設けられ、光がさしこむように設計される。

塔のなかには、監視人が一人配置され、各人はひとりずつ独房内に閉じ込められ、同輩との接触を断たれる。また、一望監視装置では、塔にいる人間の目には、すべての独房が一望できるが、円周状に並んだ各独房からは、中心にいる人が見えない。ここでは、見る=見られるという一対の事態が切り離され、各部屋の被監視者の目から、中軸部分にいる人が見えず、権力の自動的な作用を確保する可視性への永続的な自覚状態を与えるという⁽⁶¹⁾。

フーコーはこの「一望監視施設」を一般化が可

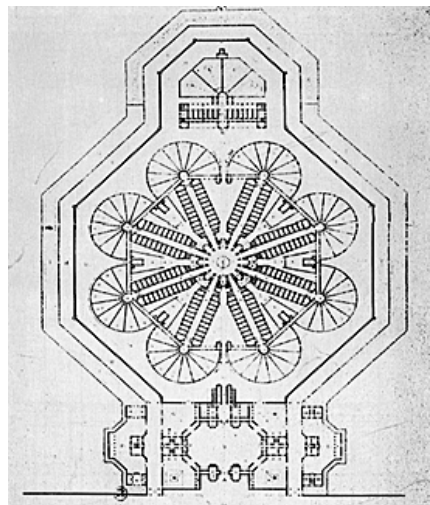


図24 一望監視施設
(ミシェル・フーコー、田村俣訳『監獄の誕生』新潮社、1977、22頁)

能な権力の作用モデルと位置付けたうえで、「これは重要な装置だ。なぜならそれは権力を自動的なものにし、権力を没個人化するからである。その権力の本源は、或る人格の中には存せず、身体・表面・光・視線などの慎重な配置のなかに、そして個々人が掌握される関係をその内的機構が生み出そうとした仕掛のなかに存している⁽⁶²⁾。」と論じた。

こうしたフーコーの研究を通して、Murdocは都市プランニングもまた権力の形態のひとつであることを指摘する⁽⁶³⁾。

それを本論に当てはめるのであれば、平安京の言説に基づいた空間配置が、天皇家という特定の

権力者の手を離れ、近世小浜城下町の都市プランニングに用いられたといえるであろう。

そして、Murdocが「言説は、所与の空間の物質性に深く埋め込まれ、「物質的な配置」がこれらの空間の「言説的」な側面を生み出すと議論されるかもしれない。これらの物質的空間と言説空間は、人間の対象者の身体に作用する⁽⁶⁴⁾。」とまとめるように、平安京の言説が城下町内の神社や渡辺氏の物質的な配置として埋め込まれ、居住者の身体に作用し、怪異譚や祭礼として表象されていたと仮定できないだろうか。

(5) 伊吹山山麓の武士団

前節では、フーコーの権力と空間に関する議論を手掛かりに特定の権力者の手を離れた平安京の言説が、近世城下町の都市プランニングに用いられていることを仮定した。

一方で、Murdocが「フーコーの研究では、説得力を持って空間のスケール間を移動するのが難しい。この弱点に立ち向かうために、フーコーの足跡をたどってきた研究者ブルーノ・ラトゥールの研究を検討することで、我々は空間のスケールの本質である関係性をさらに十分に理解することが可能になる⁽⁶⁵⁾。」と論じるように、こうした問題はラトゥールの研究を通して関係性のなかで検討されるべきであろう。

つまり、フーコーが対象としたのは、あくまでも建築空間という空間的なスケールでのことであつたのである。

しかしながら、続けてMurdocがラトゥールを通して述べるように、そもそも空間的なスケールは分散した地点間の権力関係から生じている⁽⁶⁶⁾とするならばどうであろうか。

すなわち、それは空間を特定のスケールから解放し、それらの地点間を取り結ぶネットワークへと焦点を移す必要性を提起する。

それは、本論が提示する「多様な関係性からなる開かれた空間」としての城下町とも符合することとなるだろう。

具体的にいうならば、平安京や小浜城下町といった都市空間としての空間的なスケールから脱し、むしろそれらを取り結ぶネットワークの段階へと入っていくこととなる。

つまりは、平安京の言説がいかなるネットワークを通し、近世小浜城下町に流入しているかという問題に迫ることとなる。

そこで本節で取り上げたいのが渡辺党のネットワークである。

さきにふれたように渡辺党は渡辺津を本拠地とした武士団であるが、呪的な側面をもち、酒呑童子説話の成立に関与していたことが指摘される⁽⁶⁷⁾。

そのうえで一点押さえておきたのは、酒呑童子説話の伝播には修験者も関与していたということである⁽⁶⁸⁾。

『出羽三山史』には「一注連掛は天長中の開基也往昔者禰宜職にて代々渡邊黨にて持來る慶長中ニ修理大夫と云者羽黒山にて入峰致テ則別當月藏坊と號す宥源より免許子孫絶えて願海と云行人居住ス是より號注連寺と也注連新山權現は則羽黒權現ヲ勸請致而本堂建立也羽黒山衆徒薩摩坊支配す則羽黒山智憲院也⁽⁶⁹⁾」とあり、渡辺党が羽黒山に入峰し、修験者となったとの記述がある。

また、室町初期に制作された『大江山絵詞』では、丹後・丹波の境にある大江山が酒呑童子の棲まう山とされるが、その周辺地である綾部市にも渡辺党の末裔を名乗る家系がいたことが『丹波志何鹿郡之部』に記載されている⁽⁷⁰⁾。

新潟県の弥彦山も酒呑童子にまつわる山のひとつである。同県長岡市の軽井沢という地域は、主に多田姓と茨木姓で構成されており、村落内には渡辺綱が腕を切り落としたとされる茨木童子が祀られている⁽⁷¹⁾。

石川県能登においても渡辺の名がみえ、ここでは来訪神行事の際に渡辺家のみ来訪神が訪れないとされており、この家系は弥彦山のある新潟より移住してきたとされる⁽⁷²⁾。

岡山県阿哲郡に位置する竜頭山も酒呑童子にまつわる伝承があり⁽⁷³⁾、周辺の地域には渡辺姓が頻出する。

これら大江山、弥彦山、竜頭山は酒呑童子に関係する山であるとともに修験道の霊地であるとされる。

そして、本節で中心的に取り上げる伊吹山もそうした山のひとつである。

応永14年に成立した『三国伝記』には「飛行上人」と題する話があり、そこには伊吹山に棲まう異形のものの存在が記されている⁽⁷⁴⁾。

さきごろ、伊吹山に弥三郎という変化のものがいた。昼は険しい山中の洞窟に住み、夜は関東・九州の遠方まで出かけ、人家の財宝を盗み、国土の凶害をなした。

天下の憂いとなったので、近江の守護佐々木備中守頼綱に、国内の狼藉を退治せよとの勅命が下る。

そこで剣難の峰に分け入ったが、いるかと思えば他郷に逃れ、たまに山にあるときは人の通わぬ竜池に隠れ、容易に退治できない。頼綱は思案のあげく、摩利支天の秘法、隠形の術を習って姿を隠し、ついに弥三郎が高時川の河中にあるとき近づいて殺した。

その後、弥三郎の怨霊は毒蛇となって高時川の井の口を深い淵になし、水がゆかないようにして田を荒廃させ、人々を苦しめた。悪霊を神と崇め井の明神として祭ったところ、毒心改まって井の口の守護神になった。

人々の暮らしに幸いをもたらすようになって、年に一度夏の頃、弥三郎は伊吹山山頂の禪定に通った。その時は一天にわかにかき曇り、霹靂が轟き霰が降るので、見た人々は、弥三郎が伊吹の禪定に通うぞ、と恐れ怖じた。



図 25 伊吹山 (岡撮影)

この話に登場する佐々木源氏とは、近江国蒲生郡佐々木荘を拠点とした武士団であり、その祖を宇多源氏としている。『尊卑分脈』によると、宇多天皇の皇子敦実親王は孫にあたる源扶義を養子とし、その子にあたる成頼が近江国佐々木荘に住みつたのが始まりとされる。また、宇多天皇系の佐々木源氏が下向する以前から佐々木荘の地には、佐々木貴山君という豪族が居住しており、両者が同居していく中で同化していったと考えられている⁽⁷⁵⁾。

弥三郎も史実に登場する人物であり、近江国柏原荘の地頭であったが、数多くの非法の為に近江守護佐々木信綱に討伐されている。

一方で『三国伝記』「飛行上人」では、弥三郎を討伐したのが佐々木信綱から佐々木頼綱にすり替わっている。

この点について佐竹昭広は、酒呑童子と伊吹弥三郎は大酒飲み、山中の凶賊、勇士により討伐されるといった点で一致しており、退治をした源頼光に相当する武将が字音の近い頼綱である必要があったのだと指摘する⁽⁷⁶⁾。

たしかに、室町時代に成立した『伊吹童子』のなかでも、伊吹三郎の遺児伊吹童子が山中に生じている不老不死の霊草の露をなめて通力自在となり、雲を起こして西方に飛んで酒呑童子となったとある⁽⁷⁷⁾。

また『酒呑童子絵巻』(サントリー美術館蔵)でも、酒呑童子はもともと伊吹の千町ヶ嶽に棲んでいたとされる⁽⁷⁸⁾。

こうした議論に沿うのであれば、酒呑童子と伊吹弥三郎、源頼光と佐々木頼綱はイコールの関係で結ぶことができることになるだろう。

ところで、高橋が指摘するように酒呑童子説話は、本来は綱を主人公とする渡辺党が有した素朴な説話が基盤にあり、そこに種々の要素が加えられていったのだとされている⁽⁷⁹⁾。

一方で『三国伝記』の「飛行上人」は、前半部は長尾寺開祖の三修上人の超人的な物語、後半部は伊吹弥三郎の物語で構成されており、修験者の伝承を多分に含んだものであったとの指摘がなされている⁽⁸⁰⁾。

そして、この弥三郎伝説の形成には、伊吹山山麓にある修験の道場である伊吹長尾寺の深有上人が関与していたとの指摘がなされている⁽⁸¹⁾。

であるならば、このネットワーク上には渡辺党、佐々木源氏、修験者といったアクターらの姿が浮かび上がってはこないだろうか。

そして、次に述べるように渡辺党と佐々木源氏との間には、ある種の親和性が想定される。

例えば、渡辺党は渡辺津に本拠を構え、呪的な意味でも水のコントロールに関連する武士団であったとされる⁽⁸²⁾。

弥三郎伝説の舞台である伊吹山は、空間的に見

ると湖北地域の主要な水源地のひとつであり、佐々木源氏が「水神」たる伊吹弥三郎を鎮め祀っていることから、彼らもまた呪的な意味で「水」をコントロールする武士団であったことが窺える。

また、伊吹弥三郎を祀った井口に拠点を構えた佐々木源氏分派である井口氏も、高時川の水利権を有していたとされており、水のコントロールに関与していた⁽⁸³⁾。

それだけでない。この井口周辺の高月観音堂、赤後寺、甘櫨前神社に奉納される絵馬には、渡辺綱が描かれており⁽⁸⁴⁾、ここでも渡辺党の影響が想定される。

また、星野重治によると南北朝期において佐々木氏の分派である京極氏は、幕府から認可された摂津国多田院の強大な知行主であったとされる⁽⁸⁵⁾。

摂津国多田院は清和源氏の祖多田満仲を祀り、渡辺綱はその娘婿である敦の養子となり、摂津渡辺に居住し、渡辺党の祖となったとされる。

また赤田氏との関連も指摘できよう。

赤田氏は、暦仁元年に渡辺恒が御家人として勲

功をあげて越後国三島郡赤田保の地頭に補任され、二男の渡辺等が赤田兵衛尉を称した。そして近江国犬上郡曾我村に土着した赤田氏は近江守護である佐々木源氏に属したとされる⁽⁸⁶⁾。

推測の域はでないが、これらのことを考え合わせると佐々木源氏と渡辺党の間にはある種の親和性があり、佐々木源氏も「平安京の言説」という律令国家が有したある種の呪的な知識をそなえていた可能性があげられるだろう。

そして、重要であるのは佐々木信綱の四男氏信が京極氏を名乗り、その子孫である京極高次が初代小浜藩主となっている点である。

であるならば、渡辺党との接触を通して京極氏にも平安京の言説が及んでいたと考えられる。

そして、これまでの議論に沿うのであれば、京極氏がプランニングした都市にも平安京の言説が空間化されていると仮定できるだろう。

そこで本論では、伊吹山周辺の京極氏が築城した城のうち比較的資料の豊富な上平寺城をとりあげたい。



図26 井口日吉神社境内に祀られる井ノ神社 (岡撮影)



図27 伊吹神社 (岡撮影)



図28 八坂神社 (岡撮影)



図29 五社神社が合祀される玉神社 (岡撮影)



図30 泉神社 (岡撮影)

上平寺城は、16世紀初頭に京極高きにより築城された山城で、京極氏館・家臣屋敷・上平寺城・城下町で構成されている。周辺には、三関のひとつである不破関が位置し、東山道が通り抜ける。

城下には、伊吹神社（創始不詳）が配置されており、道饗祭でも祀られた素戔鳴尊を祭神とされている⁽⁸⁷⁾。

さらに、周辺の八坂神社（734年）、泉神社（646年）⁽⁸⁸⁾、五社神社（創始不詳、現在は玉神社に合祀）⁽⁸⁹⁾にも素戔鳴尊が祀られている。

なかでも八坂神社、泉神社は上平寺城が形成される以前の古社であり、おそらく不和関に関連する神社を取り込んだものであったのだと考えられる。

また、家臣団屋敷に名がみえる多賀氏は、酒呑童子説話に登場する源頼光の末裔を名乗るとする説がある⁽⁹⁰⁾。

以上のことから、京極氏が平安京の言説に基づき、上平寺城下のプランニングを行っていた可能性が浮かび上がる。

そして、この平安京の言説がネットワークを介して小浜城下町へともたらされているのであれば、それはラトゥールの研究を通して Murdoc がいう「権力のネットワーク⁽⁹¹⁾」に相当するといえよう。

むろん、これだけで複雑に張り巡らされた権力のネットワークを描ききれているとは言えない。

しかしながら、本論では渡辺党、京極氏（佐々木源氏）、修験者といったアクターがネットワーク上に浮上することをひとまず指摘しておく。

(6) 動員される異種混合なアクターたち

ここまで渡辺党、京極氏、修験者のようなアクターが関与する「権力のネットワーク」を通して平安京の言説が小浜城下町へともたらされ、呪的都市プランニングとして空間化されている可能性を論じた。

本節では、こうした権力のネットワークがいかにして空間を形成していくのかという点に焦点を当てたい。

そこでまず、呪的都市プランニングにおけるアクターが、どのようにして権力のネットワークに動員されているのかをみていく。

第4節で取り上げた小浜城下町の呪的都市プランニングとして想定した神社の多くは、実は近世以前からその場所に位置するものであった。

山王神社、釣姫神社、玉津島神社は鎌倉期に、八幡宮は平安末から鎌倉期に、天王社もかつては雲月宮という呼称で中世初期頃に祭祀されたとされ、これらはいずれもこの時期に小浜の地が湊津として発展し、人々が集住し始めたことと対応していると考えられている⁽⁹²⁾。

小浜と同様に日本海側の湊津である越前国敦賀の松原客館は、渤海の使節団を迎えるために設置されたと考えられる迎賓・宿泊施設であるが、付近の別宮神社前の浜堤において、鎮火儀礼が行われたとみられる遺構が発掘されている⁽⁹³⁾。

和田萃が指摘するようにこの鎮火儀礼と道饗祭は、季夏と季冬に行われる、宮城四隅の衢が祭祀の場である、といった点で類似の祭器構造をもつ

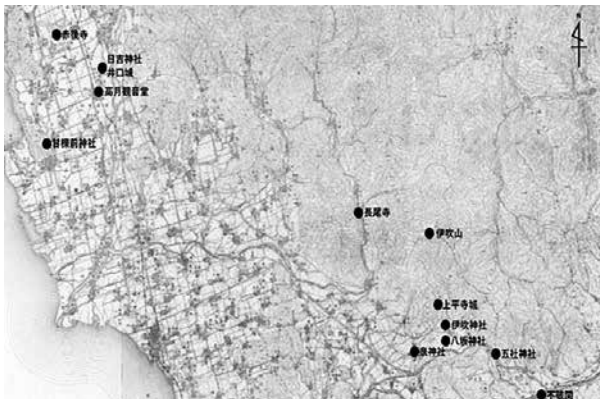


図 31 伊吹山周辺図

(ひなた GIS より取得した明治年間の地図に岡加筆)



図 32 『上平寺城絵図』トレース図

(『京極氏の城・まち・寺—北近江戦国史—』伊吹町教育委員会、2003、口絵2に岡加筆)

という⁽⁹⁴⁾。

であるならば、港もまた衢に近い場所性を有していたといえる。

そして、海陸の交通路が混じり合うのが小浜の地であった。それゆえに道饗祭に関連する神が配置されたと考えられないだろうか。

より抽象化するというならば、この場所が交通路というネットワークにおいて極めて重要な位置にあったことになる。

そうしてネットワーク上の要衝に配置されたアクターは、近世小浜城下町のプランニングに際して、再び動員されていく。

すなわち、衢の神であったものが、城下町の境界部の神へと変えられていくのである。

このようにして見るのであれば、この権力のネットワークは近世小浜城下町が形成される以前のものを巻き込んでいっていることがわかる。

そうした権力のネットワークのはたらきは、どうやら周辺の山々にも及んだようである。

例えば、若狭地方における修験の連山として信仰される多田ヶ岳麓の多田寺には次のような伝承が残されている。

源満仲は鎮守府將軍を辞して後、住職として閑居余生を送り、後には摂津に移り多田源氏の祖となった。満仲の子頼光は、朝廷から大江山の鬼退治を命ぜられた。(中略)
命令を受けた頼光は、若狭の父を訪ねてこの多田寺まで相談に来た。ここで術策を練って、正面から攻撃しては到底勝算はない、山伏修験者を装って潜入し、謀殺するより外に手段なしということになった。



図 33 多田ヶ岳 (岡撮影)



図 34 多田寺 (岡撮影)



図 35 甲掛山 (岡撮影)

多田ヶ丘の行場に於て型通りの修行に励み、俄かづくりの速成山伏が出来上がった⁽⁹⁵⁾。

一方で、甲懸山にも次のような酒吞童子に関連すると思われる伝承がみられる。

神谷部落の背後南方に甲掛山と呼ばれる岩石の多い険しい山がある。此の山には遠くからもよくわかる大きな山の割れ目がある。これを大割れ戸といっているが、この下の方に大きなほら穴がある。この岩穴は丹波の大江山に続いているといわれ、ここに近づくところからともなく風がわき起り、すごく気味が悪くてだれも中へ進むことができない。昔ここに鬼のような賊が住んでいた⁽⁹⁶⁾。

この伝承と類似するものが、延宝年間に成立したとされる『若州管内社寺由緒記』に記されており、甲掛山に鎮座する神社の由緒が源頼光の鬼退治に説かれている。

□□□権現 カフカ山と申所に御座候 此山には昔鬼神住申候付□□相手に御下り被_レ成候而此権現へ祈誓御懸被_レ成候へは願成就□□故、当社は則頼光御建立と申伝候へども年来は不_レ知候 禰宜無_レ之村中より廻りに勤申候 社領は武生村高の内に五反御座候へ共弾正殿已来無_レ之⁽⁹⁷⁾

箱山付近に位置する山ノ井相杜神社にも、次のような酒吞童子説話に関連する話が『若州管内社寺由緒記』に記されている。

小浜・福井城下町の呪的都市プランニング

蔵王権現 吉野より垂迹の神と申伝候 然は神谷村に鬼神住為退治源頼光御下り被成彼鬼神の躰を御覧被成夫より杉山□□□谷に引籠り給ひて権現に祈誓し給へば頼光夢□を受給ひて無難鬼神を退治被之社建立□□申伝候 則神田も二町一反八畝候へ共大閣様御代に落申候故只今は大破におよび候⁽⁹⁸⁾

ここでは、神谷山（甲掛山の別称）に棲む鬼神を退治するために源頼光が祈誓し、鬼神を退治したことが山ノ井榎杜神社に祀られる蔵王権現の由緒であるとされている。

蔵王権現は修験道において信仰されており、『若州管内社寺由緒記』の箱山に関する記述にも修験者が登場する。

箱大明神 御鎮座の時代相知れ不申候 往昔当村伊屋の谷の峰より夜々光指申故不思議に存去る山伏を頼彼嶺へ登せ見申候へは一つの箱有り其内より光指か金色の尊像一躰被成御座候 然上は当所の鎮守とあがめ来り何方に成とも御鎮座の地御示次第に御社建立可仕と祈誓仕り候へ者則一夜の内に森出来候 依之若□□夜の森と他国迄申伝候 御供田二反六畝二十六歩御□□□□へ共浅野様御検地に御年貢被仰付候⁽⁹⁹⁾

聞き取り調査では「小浜の漁師が山見をする際に目印にするのが、多田ヶ丘と甲掛山⁽¹⁰⁰⁾。」と聞き取った。

また、甲懸山については「昔、小浜の西津に住む漁師が夜に漁に出かけ、遭難した。すると宝鏡

山（甲掛山の別称）の頂上が光り輝いて、目印となった。そのため西津の人からは、航海の神として信仰されている。西津の人から寄進を受けた棟札も見つかっている。宝鏡大神は地元では牛馬の神とされ、昔は毎年八月十五日に牛馬を引いて参拝した。山中には牛神の大岩と呼ばれる岩がある⁽¹⁰¹⁾。」とのことであった。

こうした山々は、多田ヶ岳同様に古代においてもランドマークであるとともに信仰の対象となっていたものであると思われる。

であるならば、こうした神が降り立つ山々であった場所が、権力のネットワークに巻き込まれていくなかで、その意味が塗りかえられていったとも考えられる。

より具体的には、平安京において流された鬼たちが帰還する北方の山々に当てはめられていったのであろう。

また、これらの山々から支流が発せられる北川も権力のネットワークに組み込まれていったと考えられる。

『拾椎雑話』には、そのことを示唆する北川河口域における怪異譚が記録されている。

むかし長源寺裏から浅ヶ瀬の間にて暑気の時水浴びまたは洗濯に出、死するもの五年三年の内には必ずある事也。全く水に溺れたるにあらず、水中に物ありて引釣込、間もなく死骸浮き上がる。これを見るに肛門破れし跡あつて外に疵なし、幾人も同断、終に療治にて助かるものなし。俗に河童のする事と云う。古老云、長源寺裏にてわざをなすは鼈なり。鼈は元来害をなすものにあらず、此所に有る



図 36 宝鏡神社（岡撮影）



図 37 箱山（岡撮影）



図 38 山ノ井榎杜神社（岡撮影）

は鼈の大なるものなり。或人川縁町通りたるに、よほどとなる鼈の浮きて向いへりより出、長源寺裏へ渡しを見たるという⁽¹⁰²⁾。

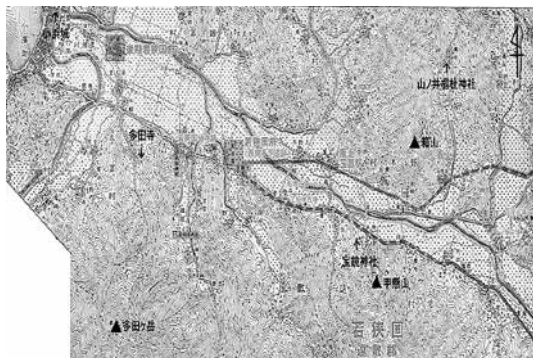


図 39 小浜城下町周辺の酒呑童子説話関係地
(島方洗一他編『地図でみる西日本の古代—律令制下の陸海交通・条里・史跡』平凡社、2009、249頁に岡加筆)

では、こうした権力のネットワークとそこに巻き込まれていった人間／非人間を含む異種混合なアクターたちをどのように解せばよいのであろうか。

例えば、Murdoc がいうように「権力はアッサンブラージュ（集合体、組み合わせ）のなかで一連の局所効果を生み出す⁽¹⁰³⁾。」のであるとすれば、この権力のネットワークは異種混合なアクターを巻き込みながら、呪的都市プランニングというアッサンブラージュをなし、それによる局所効果として様々な怪異の言説が生成されていた、と考えるのもよいのかもしれない。

さてここでいまひとつ押さえておきたいのは、こうした局所効果が起こる場所は佐々木が指摘する古代律令国家によって整備された交通路という権力のネットワークにおける要衝といえる地点に位置したことである。

図 40 は、佐々木が平安京の神話的世界観をアクターネットワーク理論に即し、より抽象化したものである。

この律令国家が整備した交通路というネットワークについて佐々木は次のように述べる。

「それがまず中央の知識（律令と記紀などの物語）を、全国に伝達するためである。また地方の情報（風土記や抵抗勢力の情報）を、中央に集める目的をもったあつたらう。

そうすることが全国支配を目論む主体にとって

重要な要件であった。（中略）そして、その地方にばらまかれた律令（法と秩序）と物語（権力の由来、宗教世界観）は、実際にそれらが具体性を持って運用されるようになるには、地方の人々の社会的実践（行為）と物質（国富・郡家・駅・宗教施設など）の空間配置がなされなければならない。これらが織りなされると、一つの知と権力の世界が、ある一定の広がりを持った具体的な空間に想像されることになる。それが『延喜式』の世界観と言ってもいいだろう。そうすると、それら法や秩序、物語、実践や物質によって取り込まれ、取り囲まれた個人たちがそれらに規制され標準化されはじめる。と同時に、その基準から逸脱した個人や集団は、排除されることになる。こうして時間をかけて権力は、これら物質と人間行為の、特殊なアッサンブラージュ（集合体、あるいは組み合わせ）を通じて循環しはじめる。そして、この権力が生み出したあらゆる要素が、このアッサンブラージュのなかで局所効果（local effect）を生みはじめる⁽¹⁰⁴⁾。」とする。

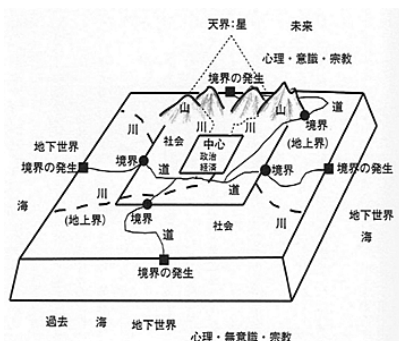


図 40 多様で異質な諸物からなるネットワーク世界
(佐々木高弘『生命としての景観』せりか書房、2019、253頁)

ただ一方でこの局所効果が生じる場所には、本論が主張する渡辺党、京極氏、修験者を巻き込んだ権力のネットワークが介在してきていることも確かであろう。

両者はともに古代律令国家から発せられているが、前者はより非人間的であり、後者はより人間的なネットワークであったといえる。

つまりは、こうした局所効果は両者の権力のネットワークが重なる場所において現前化したものであったということになる。

小浜・福井城下町の呪的都市プランニング

その意味するところは、ネットワーク上の局所効果は、権力のネットワーク上にいる人間と空間をも含む非人間間の相互作用によるものであったと考えられないだろうか。

II 福井城下町の呪的都市プランニング

本章では、小浜城下町と同じく北陸道上の城下町である福井城下町を検討する。

小浜城下町と同じく福井城下町においても江戸時代の記録のなかに怪異譚がみうけられるが、ただその事例数は、小浜城下町と比較しても少なく、全体的な傾向を指し示せるほどのものとはいえない。

しかしながら、次節でふれるように福井城下町にも怪異が多発する場所が存在した。

(1) 福井城下町の怪異

第十六代福井藩主松平春嶽の記した随筆『真雪草紙』には、春嶽自身が見聞した噂話が記されている。次にあげる怪異譚もそのひとつである。

毎年柴田勝家の戦死の日には、大橋（九十九橋）、毛矢辺りを勝家が馬に乗って走り回るという。よって祥月命日には誰もが恐れて、六ツ時ごろから戸を閉めて外出をしなかったという。また、杉田氏の屋敷内の小さい祠には勝家を祀り、毎年命日には祭りをして供物をするという⁽¹⁰⁵⁾。

また、次のような類似の伝承も採集されている。

天正十一年四月二十四日は賤ヶ岳の敗戦から逃れて帰城した柴田勝家の命日である。柴田神社の祭りはこの日に行われるが、以前は杉田六太夫屋敷の一隅に苔むした石祠とこれを包んだ森とがあるのみであった。明治の御一新までは毎年、その日の夜に代参が立ち、杉田屋敷内から石祠までの道筋は鯨幕を張った。それだけでなく、その夜は杉田屋敷をはじめ隣屋敷もその隣屋敷も門を打ち雨戸を閉して決して表や外を見ないことに慎んだ。それは二十四日の夜には首無し馬に跨った柴田勝家公の亡霊が通られ、これを一目でも見

たものは必ずその年のうちに死ぬといはれ、禁を犯した隣屋敷の仲間や刻限を間違へた朝市行きの肴屋が亡霊に睨まれて案の定その年に死んだという慣例も口から口へ上されて居る。代参の立つ夜の九十九橋から本町を経て佐久良御門を入り鉄門を通り下馬御門内へかけての町筋、屋敷筋も悉く大戸を卸し門を打ったことも杉田屋敷附近と同じことであつた⁽¹⁰⁶⁾。

白衣の首のない人が白馬にまたがって行列していくのを見ると、その人は死ぬ。一説では、「天下の名将柴田勝家公」といえば命は助かるという。別伝では、この行列は4月のホトトギスのなくころには毎晩出るという⁽¹⁰⁷⁾。

小浜城下町と同じく、これらの怪異譚における場所を示したのが図41である。

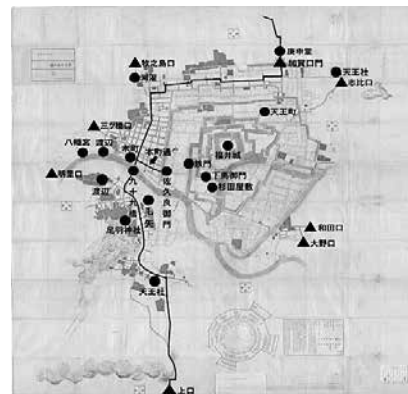


図41 福井分間之図にみる当時の景観
(福井県文書館デジタルアーカイブより
引用したものに岡加筆)

(2) 福井城下町の呪的都市プランニング

まず確認できるのは、勝家の亡霊の徘徊する場所は、近世の北陸道沿いであり、とりわけ九十九橋は城内と城外を隔てる境界部となっている点である。

さらに、九十九橋より南の道に着目してみよると、足羽神社と天王社の周辺が空間的に湾曲していることがわかる。これはいわば、福井城下町へと至る近世北陸道沿いの区画が九十九橋、足羽神社、天王社の3つに分けられているといえよう。

図43は、寛文年中に描かれたものを模写した「福井城下眺望図」であるが、ここでも九十九橋以南の北陸道が空間的に湾曲していることがみてとれる。

先述のように、このような都市の南方を3つの区画に分ける町割りも、平安京にもみることができる。

平安京では南門の羅城門、朱雀門、建礼門において有事の際に大祓を行い、穢れを祓った。それは鬼たちが、すべての街道の集まる羅城門から侵入し、天皇のもとへとやって来ると観念されたためである。こうした鬼たちは、日本列島の四隅に設定された根の国底の国より道をやって来るとも考えられていた。ゆえに、平安京に至るまでの衢において鬼たちを饗応し、お帰りのために道饗祭が行われたことも既に触れたかと思う。

そして第I章では、こうした平安京の言説に基づいた呪的都市プランニングが小浜城下町において施されていることを指摘した。

このような平安京の言説に基づいた呪的都市プランニングは、福井城下町にも見出すことができる。

すなわち、柴田勝家の亡霊が徘徊する近世北陸道が通る、城下町南方に位置する天王社（現在は木田神社）には、道饗祭でも祀られた牛頭天王が配されるのである⁽¹⁰⁸⁾。

次に、寛保年間に成立したとされる『越藩拾遺録』には「文明年中一乗二勧請ナルニ、正親町院永禄年中再建アリ。初ハ木町ノ末ニ在リシヲ、市中穢ラハシキ所ナレバトテ、宝永年中今ノ社地ニ移ス。神職渡辺某、別当勝軍山正顕寺松寿院⁽¹⁰⁹⁾。」とあり、八幡宮（現在は湊八幡神社）の神職が渡辺氏であり、元々は木町に位置していたことが記されている。

現在の社家によると戦時中の福井大空襲で社家が変わっており、渡辺家についての詳細は不明であるという⁽¹¹⁰⁾。

しかしながら、福井分間図に描かれる九十九橋の周辺にも渡辺姓が散見され、この空間的な配置から渡辺党に組する家系であった可能性があげられるであろう。

足羽神社も摂津国渡辺に位置し、渡辺氏が代々社家を務める坐摩神社の祭神である生井神・福井



図42 九十九橋（岡撮影）



図43 福井城下眺望図 寛文年中の原図を大正八年に模写したもの（『福井城と城下町の姿』福井市立郷土歴史博物館、2017、2-3頁に岡加筆）



図44 木田神社（岡撮影）



図45 八幡宮（岡撮影）



図46 足羽神社境内に祀られる座摩神（岡撮影）

小浜・福井城下町の呪的都市プランニング

神・網長井神・波比祇神・阿須波神の五柱が祀られている⁽¹¹¹⁾。

和田口を抜けた先に位置する和田八幡宮は、多田満仲により創建されたとされる⁽¹¹²⁾。

既にふれたように、この満仲も娘婿である敦の養子が渡辺綱であるとされ、渡辺党と密接な関係をもつ人物であったとするならば、ここにも渡辺党の影響が及んでいるといえよう。



図 47 和田八幡宮境内の多田満仲像（岡撮影）

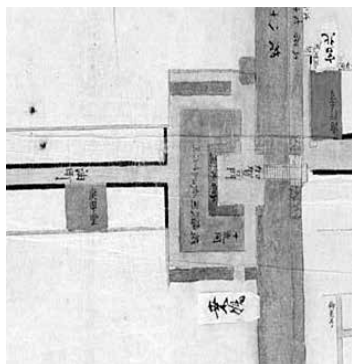


図 48 福井分間の図に描かれた庚申堂



図 49 福井分間の図に描かれた河濯神

牧野嶋口には、小浜城下町と同様に庚申が加賀口門の付近にみられる。

また、同じく小浜城下町でも祀られていた大祓から分離した神である河濯神が牧野嶋口に祀られていることが確認できる。

これらもまた、城下町の境界を呪的に防御するために配置されたアクターであったと思われる。

福井城北東には、天王町という町があり、これは福井城築城のときに鬼門除けとして天王社（現在は簸川神社）がこの地に移されたことに由来する。この天王社は享保16年に志比口へと遷座され、明治7年に簸川神社として加賀口門近くに鎮座され、現在に至っている⁽¹¹³⁾。

このようにしてみると、柴田勝家が平安京の鬼や疫神たちと同じように「平安京の言説」に組み込まれていることがわかる。また、それと呼応するかのように、関連する神、渡辺姓といったアクターも空間的に配置されているのである。

ところで、この福井城下町のプランニングには、佐々木が平安京の言説に基づく呪的都市プランニングを指摘したあの名古屋城下町の町割りを行った徳川家康が関与しており⁽¹¹⁴⁾、家康の次男である松平秀康が初代藩主となって明治期まで松平家の藩政が行われている。

それはフォーコー的に言うのであれば、平安京の言説に基づいた空間配置が特定の権力者の手を離れ、近世城下町の都市プランニングに用いられたといえるだろう。そして小浜城下町と同じく、平安京の言説が城下町内の神社や渡辺氏の物質的な配置として埋め込まれ、居住者の身体に作用し、怪異の語りとして表象されていたと。



図 50 簸川神社（岡撮影）

また、そうした平安京の言説は、ラトゥールの言葉を借りるのであれば、特定のネットワークを通して、ここ福井城下町にも流入してきているといえるであろう。

ただ異なるのは都市の秩序を脅かす魔なるものが、柴田勝家という人物に置き換えられているという点である。

(3) 首なしの意味論

ではなぜ、柴田勝家が福井城下町の怪異として立ち現れるのであろうか。

まず、この怪異譚において注目したいのが、身体の欠損という「不具性」である。

民俗学者の柳田國男は「大昔いつの代にか、神様の眷属にするつもりで、神様の祀りの日に人を殺す風習があった。おそらく最初は逃げてもすぐ捉まるように、その候補者の片目を潰し足を一本折っておいた。そうして非常にその人を優遇しかつ尊敬した⁽¹¹⁵⁾。」と、一つ目小僧の起源を論じる。

あるいは、民俗学者の谷川健一は「片目の神は、銅や鉄を精錬する古代の技術労働者が、炉の炎で眼を傷つけ、一眼を失くしたことに由来すると私は考えている。弥生時代に始まった金属精錬の技術は、中国大陸あるいは朝鮮半島から招来されたものであるが、当時は、そうした技術をもって石よりも硬く鋭い製品を作り出すことは、神にもひとしい仕業として驚歎的となったことは想像するにむずかしくない。したがって眼をやられた労働者は神としてあがめられた⁽¹¹⁶⁾。」と述べる。

すなわち、妖怪や神の身体の欠損の背後には通常の人々とは異なるような、ある種の差異の意識が潜むことを示唆するのである。

そのうえで、注目すべきは、九十九橋に現れる亡霊の正体が、柴田勝家に結び付けられている点である。特に3つ目の事例に至っては首が無いにも関わらず、その正体が勝家であることが示唆されている。

柴田勝家は、大永年間に尾張国で生まれたとされる。若くして織田家に仕え、信長死後は豊臣秀吉と対立した結果、賤ヶ岳の戦いで敗北し北庄城(後の福井城下)で自刃する。

興味深いのは、死してその存在が忘れ去られるのではなく、死後に神として柴田神社に祀られ、

記憶されていくというプロセスを踏んでいる点である。

文化人類学者の小松和彦が論じるところによれば、ある人物が死後に神となるパターンは大きく分けて二種類ある。怨霊を鎮めるために祀り上げる「祟り神(怨霊)」と、生前の偉業を継承し後世に伝えたいという思いから発する「顕彰神」がそれにあたる。前者は崇徳院や菅原道真といった非業の死を遂げた人物であり、後者は豊臣秀吉・徳川家康などの為政者と、民衆の側から祀られるものがある⁽¹¹⁷⁾。

本論で取り上げている勝家は、敗戦の将として死に、後に怪異としても語られている点から前者に組すると考えられよう。

そのうえで着目すべきは、「祟り神(怨霊)」には、勝家同様に「首」にまつわる怪異譚を有する人物らが名を連ねている点である。

例えば、崇神天皇に反乱し討ち取られたとされる武埴安彦命、彼もまた斬首した首が祝園まで飛んだという伝承を持つ⁽¹¹⁸⁾。そして、その怨霊を鎮めるために行われたのが、京都府相楽郡祝園・棚倉の居籠祭だとされる。

あるいは、聖武天皇の御代に内乱を起こした藤原広嗣も断られた首が天に昇り、空中で赤い鏡となって、それを目撃した人々が死んだ、とする伝承をもつ⁽¹¹⁹⁾。そして、現在は奈良県南都鏡神社、福岡県荒生田神社、佐賀県鏡神社二宮に祀られている。

新皇を自称し東国の独立を目論んだ平将門に至っては、首が飛ぶだけでなく、勝家と同じく首がない状態で馬乗し、やって来るという伝承をもつ⁽¹²⁰⁾。将門も都内の神田神社や首塚などに祀られている。

人物ではないが、あの酒吞童子も天皇が遣わせた頼光一行に討ち取られた時、首のみで兜に噛みついていて。これも京都府老ノ坂の首塚大明神として祀られている。

以上のような「首」にまつわる伝承を有する律令国家の論理に反するような人物らの文脈に勝家を落とし込むことができないだろうか。

こうした身体の欠損を近年の人文地理学が主張する「排除の地理学」から考えるのであれば、身体は自己と他者を区別するものであり、一旦他者

としてみなされれば空間的・社会的に周縁化された場所へと排除される⁽¹²¹⁾。

であるならば、平安京の鬼と同じく交通路を通り、都市の中心へと向っていく勝家の亡霊の徘徊ルートはまさにそのことを象徴しているといえよう。



図51 勝家公を祀る柴田神社（岡撮影）

(4) 「排除」される柴田勝家公

前節では、首なしの亡霊として語られる勝家が「排除」という性質を帯びていることを指摘した。かつそれは空間上にも表象されたものであり、勝家の亡霊の徘徊ルートは平安京の鬼と同じく道を伝い、都市の南門から中心へと向かっていくものであった。

気がかりなのは、彼が一体なから排除されたのか、ということである。

そのことが、この勝家の亡霊が近世福井城下町に立ち現れるということと関係していると思われる。

Murdoc は都市プランニングとは権力の形態のひとつであり⁽¹²²⁾、周辺の状況の一部を選択的に引き寄せ、内包と排除を行う行為であるとしている⁽¹²³⁾。

ならば、勝家は異種混合な実在を含む福井城下町の都市プランニングにおいて排除されたのではないかとの仮説が成り立つ。

それを探るためにまず、福井城下町の場所性を検討したい。

福井城下町が置かれた場所は、古代には北陸道が通り抜けた、つまりは交通路という権力のネットワーク上に位置していた。

『福井県史』によると、九十九橋の南に足羽駅が置かれ、北陸道がそのまま真っ直ぐと抜けてい

く様相であったようである⁽¹²⁴⁾。

この場所は北陸道が通るだけでなく、九頭竜川・足羽川を通じて三国湊へと繋がる交通の要衝といえる場所でもあった。

実は、この交通の要衝といえる場所に貞観13年に木田に牛頭天王を祀る天王社が配されており、この場所がかつて道饗祭の場であったことが想定される。

この場所性は、院政期においても同様であったと思われ、滝口の武士を輩出していた河合斎藤氏がこの地を本拠としていた⁽¹²⁵⁾。

中世になると、北陸道沿いに町場を形成していた足羽三ヶ庄（北庄・石場・木田）に商人により軽物座が結成され、足羽川を挟んで町場が形成された。そのうちの北庄には日蓮宗の本祐寺、浄土真宗の道場、真宗高田派の仙福寺などの寺院が所在しており、宗教的色合いも見られた。また、足羽山の北麓には足羽神社の神官が居住する館屋村があり、北庄に所在する神明社の門前にも門前町が形成された。15世紀後期以降は、朝倉氏の一族である朝倉土佐守家の居館が置かれ、領国支配の拠点となったと考えられている⁽¹²⁶⁾。

柴田勝家は、この北陸道沿いに町場を形成していた足羽三ヶ庄（北庄・石場・木田）のうち、九十九橋北側の北庄のみを城下町として位置づけた。

建築学者の登谷伸宏によると、北庄城下町は次の6点の特徴を有するという⁽¹²⁷⁾。

- ①足羽三ヶ庄という既存の町場を城下町として包摂するとともに、城下に一乗谷から移住させた商工業者の集住地区（一乗町）を新たに設けた。
- ②城郭と家臣団・一部の直属商工業者の集住地区を惣構で圍繞した移行期町郭外型の城下町である可能性が高く、直属商工業者は、惣構の外側にも居住した。
- ③多数の寺社を一乗谷などから移転させて城下に配した。
- ④城下町を楽座とするとともに、橘氏を唐人座・軽物座の座長とし、城下の商工業者の統制を担わせた。
- ⑤橘氏の支配は、天正3年以前から三ヶ庄に居住した商工業者のみならず、柴田氏直属の商工業者、および一乗谷から移住した商工業者

にも及んでいた。

⑥城下町全体を統轄する町奉行を置き、行政的な役割を管掌させた。

そのうえで北庄城下町を、市町を給人居住域と接するように設けることにより城下へ統合し、空間的な一元化を進めた空間構造を備え、かつ市町にも直属商工業者が居住するような城下町を「移行期町郭外型」とし、織田政権の城下町の到達点のひとつであるとする。

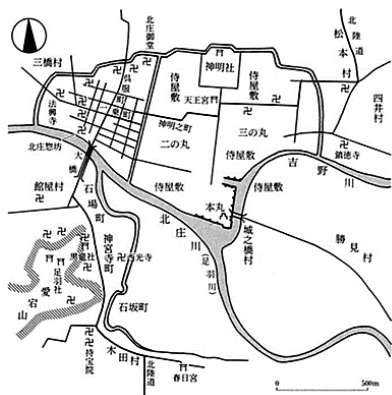


図 52 北庄城下町復元図
(福井市編『福井市史 古代・中世』(通史編 1)、
福井市、1989、846 頁)

その後、賤ヶ岳の戦いによって北庄城下町が崩壊し、近世の福井城下町が形成されていくこととなる。

こうした流れのなかで、強調すべきは多種多様なアクターが流入してくる点であろう。

つまりは、かつて衝であった場所に性質の異なる異種混合なアクターが流入してくる。

そして、その異種混合なアクターたちは、近世福井城下町の形成過程において再び動員され、アッサンブラージュ(集合体、組み合わせ)となっていく。

ここでもやはり小浜城下町と同じように、かつて衝の神として権力のネットワーク上に配置されたアクターが、都市プランナーの手によって動員され、城下町の境界部の神へと翻訳されている。

一方で Murdoc は、「プランニングでは、特定の空間を関係性の積み重ねのように考えることを必要とする⁽¹²⁸⁾。」と述べる。

たしかに、この福井城下町という空間も先述の流れの中でみるのであれば、関係性の積み重ねにより成り立っているのだと理解できる。

では、この空間の関係性、そしてその積み重ねというものをどのようにして捉えればよいのだろうか。

Murdoc は空間を形成する関係性の本質について次のように述べる。

「我々は空間の関係性は本質的に強く規範的または比較的流動的なもののどちらかである可能性を理解する。言い換えれば、空間は権力のネットワークにより強固に形成されるか、または競合する関係性の配置によりつくられることができる⁽¹²⁹⁾。」のであると。

前者の空間の関係性は、どちらかという権力のネットワークによって種々のアクターが動員され、その意味が塗りかえられていった小浜城下町の事例に当てはまるであろう。

一方で福井城下町は、後者の流動的で競合する関係性の配置からなる空間であるように思えてならない。

なぜならば、これまで述べてきたようにこの空間は平安京の言説、商工業、宗教、武力といった多様な関係性が重なる地点であったといえるためである。

ではこの場合、競合する関係性の配置とはいったい何を指すのであろうか。

おそらく、関係性の積み重ねのなかで理解できよう。

古代には律令国家が整備した北陸道が通過し、河川によって三国港と結びついた衝に相当する場所であった。そこには道饗祭でも祀られた牛頭天王を祭神とする天王社も配置されていた。

その意味するところは、古代律令国家により形成された権力のネットワーク上において重要な位置にあったということである。

しかしながらその一方で、中世においては、商工業、武力、宗教など平安京の言説とは異なる多様な関係性が流入してくるある種の空白地帯的な地点であった。そして勝家がそれらのみこみ、一元化を図ったのが北庄城下町であったといえる。

その北庄城下町の崩壊後に平安京の言説を共有したと思われる徳川家が都市をプランニングし始める。

つまりは、小浜城下町同様に古代に形成されたネットワーク上重要な地点に、同じく権力のネッ

トワーク上にいたと思われる人間が都市をプランニングという行為を通して、呪的都市プランニングをつくりあげる。

ただそこには、柴田勝家というまったく異なる関係性が介入してくる。

であるならば、平安京の言説を拡散した権力のネットワークと中世の商工業、宗教、武力を空間的に一元化した勝家という競争する関係性の位相が浮かび上がらないであろうか。

再度述べておこう。都市プランニングとは権力の形態のひとつであり、周辺の状況の一部を選択的に引き寄せ、内包と排除を行う行為である。

つまりは、近世福井城下町の都市プランナーによって柴田勝家をも含むあらゆる異種混合なアクターが動員され、呪的都市プランニングというアッサンブラージュをなし、怪異譚といった意味が生成されていく。

ただ勝家はこの空間を形成する関係性の積み重ねのなかにおいては、まぎれもなく異物であった。

そうした競争する関係性の配置のなかで、彼が「排除」という性質を帯び、現前化されたものが、あの九十九橋の首なしの怪異譚であったといえないであろうか。

Ⅲ 結論

本論は、小浜・福井の2つの城下町を新たに浮上してきたポスト構造主義地理学が提示する「開かれ、多様な関係性からなる空間」として検討してきた。

それらを通して見えてきたのは平安京の言説に基づいた呪的都市プランニングのなかで人間／非人間を含めたアクターが絶えず動員されていることである。

具体的には、古代においてもランドマークとされたであろう山々、衢に祀られた神々、勝家のような人物らが動員され、その意味が流動的に変化しながら、プランニングのなかに取り込まれていた。

それは、Murdocがというような関係性の積み重ねのなかで理解されるべきことであったといえる。

なぜならば、呪的防御としての神社が元は衢の神であったように、あるいは酒吞童子に関係する山々が元は神が降り立つ山々であったように、あ

るいは平安京の論理とは異なる空間のアイデンティティを有した勝家が排除された形で語られたように、古代から近世にかけての関係性の層のなかでそれらは起こっていると思われるためである。

本論では、権力のネットワークが様々なアクターを巻き込みながら、呪的都市プランニングというアッサンブラージュ（集合体、組み合わせ）をなし、それによる局所効果として怪異の言説が生成されている点も指摘した。

そして、その場所が佐々木のいう古代律令国家が整備した交通路という権力のネットワーク上における要衝と重なる点も確認した。

このように人間中心主義から脱却し、新たに浮上してきたポスト構造主義地理学の議論を援用することで従来とは異なる視点を提示することができた、といえるだろう。

ただ一方で、Murdocはこのポスト構造主義地理学と人文主義地理学について次のようにも主張している。

「人間の重要性は、議論される。言説、テキスト、議論と意味の生成の他のメカニズムという事実は、特定の方法で世界—人びとと自然—と人間が関わるよう動機付けることを目的としているということに由来する⁽¹³⁰⁾。」

つまりは、世界と関わろうとしなければ何も発生しない。それは逆説的にいえば、人間が世界と関わろうとするがゆえに、意味の生成のメカニズムが動き始めるということである。

そして、人間中心主義から脱却し、ネットワークを重視するポスト構造主義地理学が人文主義地理学に反するものでなかったことも示唆している、といえよう。

こうした議論に沿うのであれば、本論で問題としている呪的都市プランニングもまた権力者が人間／非人間が混合する世界と関わろうとする仕方であったといえる。

平安京の言説にもとづき都市プランニングを行っていた彼らプランナーもまた権力のネットワーク上における一アクターに過ぎない。

しかしながら、意味の生成のメカニズムが動き出す、すなわち近世の城下町において怪異の言説が生成されるきっかけとなりえてるのは、他でもなく彼らが空間をも含む異種混合なアクターが混

じり合う世界と関わり合おうとした時なのである。
 であるならば、本論が追い求めてきた怪異譚も
 また、人間と空間をも含む非人間が混ざり合う異
 種混合なネットワークにおける相互作用のなかで
 生じた局所効果であったといえるだろう。

以上がささやかであるが、本論が呪的都市プラ
 ニニングの研究を通して示したかったことである。

表1 『拾椎雑話』収録の怪異譚一覧

番号	掲載元	場所	人物	時	要約	備考
1	『拾椎雑話』巻三の一	江戸	小泉六郎右衛門		江戸に住む中小泉六郎右衛門という人の娘が瘧疾にかかった。神に禱を供えるのを「元来瘧疾は病氣なり、何ぞ神あらんや、是世俗の仕業、禱を取るべし、左なくは蹴ちらさんと禱を下げた。其夜から痺がり、むしり血を流し、「主人我をあなた」と口ずさみ、一夜にして死んだ。	
2	『拾椎雑話』巻三の一、一	上小路(鶺鴒小路)	吹田惣左衛門		吹田惣左衛門が、五七歳の時瘧疾にかかり、神に禱を供えた。小鬮を猫が啜えていく時、惣左衛門夢中に叫んで「やれ痛い」と言った。家内驚いて小鬮を取り戻すと、元のように寝入った。	『拾椎雑話』巻十五に吹田家は上小路に住むとある。上小路は鶺鴒小路に改変された。
3	『拾椎雑話』巻三の二		木崎平左衛門		木崎平左衛門が若い頃疫れいを煩った。その間枕元に知らない老女が来て平左衛門を睨み付けた。	
4	『拾椎雑話』巻三の三	富澤町 風呂小路	筆屋式部母 中間角平		富澤町筆屋式部の母が参詣の道中に落馬した。留守中の孫女が縁側から落ちたのが同刻であった。また、元文の頃風呂小路の中間角平が参詣の道中に煙草の火の粉が付き、怪我をした。同日に角平家内自火で焼失した。	
5	『拾椎雑話』巻三の四、一	塩屋町 松本町 川線町 洲崎町	木挽某		疫病が流行した際、塩屋町の木挽某が土橋で、松本町から来る十四五歳の童子を見かけた。川線町からも童子が来て、「床に異な物をか置いて面倒に押し早く出な」と言って別れた。これを聞き、洲崎町の疫病禰ふ家に鐘撞の晝像をかけるのと病人は快成した。	
6	『拾椎雑話』巻三の五				ある年、小豆の降る事があり、見ると小豆に似て小豆ではない。また毛の降る事もあった。	
7	『拾椎雑話』巻三の六	洲崎町 青井浦	新屋市左衛門 中山何某	寛文の頃	寛永の頃、洲崎町の新屋市左衛門家に中山何某がいた。青井浦で大きな赤石を取り外庭に置いた。夜、庭が騒がしく、見るとこの石であった。	
8	『拾椎雑話』巻三の七	川線町	紙屋長左衛門 船頭	元禄の頃	元禄の頃、川線町の紙屋長左衛門に船客が来た。船頭によると、昨夜水戸口を通る時に水底を駆け越る髪長いものがいた。	
9	『拾椎雑話』巻三の八	越前沖	丹後屋彦右衛門宿船頭		丹後屋彦右衛門宿船頭が物語るに、夜の越前沖で舟が動かなくなった。ろうそくを灯し見ると、軸の大きき式尺廻り、綱のような物がいた。	城下町外
10	『拾椎雑話』巻三の九	八百屋町 証明寺裏北角二軒目	後家姥	享保の頃	享保の頃、八百屋町に後家姥がいた。神佛の御夢想などあやしい事をいうため夢想婆々といわれた。この家に何者もなくつてを打かけ、砂子、小豆を降らすことが昼夜ともあった。借来を招き施願鬼すると止んだ。狸の仕業だという。この家は、証明寺裏北角二軒目にあり。	
11	『拾椎雑話』巻三の十	鶺鴒小路	赤木理左衛門家 祖母、娘、孫娘	宝暦三年	宝暦三四年、鶺鴒小路の赤木理左衛門家は祖母、娘、孫娘と三人暮らしであった。来客があったと思っても誰もいない、目の前の器物がなくなることがあった。祈禱をしても止まず、宿坊妙興寺へ引越した。三十日過ぎると止まった。狐狸の仕業という。	
12	『拾椎雑話』巻七の八	観音堂	木戸為三		木戸為三が夜観音堂の辺りで、青光りする手鞠ほどの火が地面から五尺ばかり立ち上がり、ふらふらと山の峯へ行き、消えるのを見た。翌朝みれば、葛縋をこぼしたる身体の黒い蟻踏がいた。	
13	『拾椎雑話』巻七の九	川崎濱 久須屋ヶ嶽 舟小屋			ある人が夏の夕方に川崎濱で久須屋ヶ嶽から飛ぶ、細長く一間ばかりのものが舟小屋の辺りに落ちるのを見た。しかし、そこに行くとい何事もなかった。	
14	『拾椎雑話』巻七の十	福岡町			福岡町のある家の屋根に夜に火が出たが其の形は動かない。怪しうその家の戸を叩いて知らせる間に、屋根の火は消えた。	
15	『拾椎雑話』巻十二の三	西小川浦常福寺	五世良和尚 雪庭		八尾比丘尼の石塔は、五世良和尚の夢に老尼が来て、「我菩提すなくし、頼よし」と云うことが三度あったため建てた。	城下町外
16	『拾椎雑話』巻十二の十	西福寺 谷の墓所			西福寺の住僧が鉢三昧を運る時、谷の墓所で幽霊が出て水を呑ませよといった。鉢を外し、水を汲んで呑ませた。	城下町外 谷の墓所の場所不明
17	『拾椎雑話』巻十二の卅三	瀬木町	組屋六郎左衛門	永禄年中	永禄年中に組屋六郎左衛門が北国より上る時、老人が便船した。六郎右衛門家でしばらく宿泊し、発足の時に「我は瘧疾の神也、このたびの恩謝に組屋六郎左衛門とだに間は瘧疾安く守るえへし。」と誓い去った。	『拾椎雑話』に組屋六郎左衛門は代々瀬木町に住むとある。
18	『拾椎雑話』巻十二の六四	空印寺			〔里人譚〕という書に、若狭国小浜空印寺の傍に洞穴が有り、むかし人魚の肉を食い八百歳を超えた女僧がここに住んだとある。	『里人譚』に収録

小浜・福井城下町の呪的都市プランニング

19	『拾権雑話』巻十六の廿八	福岡町	米屋勤兵衛	天和貞享の頃	天和貞享の頃、福岡町に米屋勤兵衛(今博右衛門事なり)という人がいた。伊豆奈の法を持っていた。	
20	『拾権雑話』巻二十の卅八	竹原家中屋敷 天ヶ城			暑夏の節に野外に蛛火があった。大きな火の玉が竹原家中屋敷なども現れた。害は無く、天ヶ城にも火の玉が見えることがあった。	
21	『拾権雑話』巻二十四の四八	天徳寺村 玉置村	佐右衛門		天徳寺村佐右衛門という人が夜玉置村に行った。道中、五六尺もある首をふらふらと振る、異形なるものがいた。世にいう見越入道と云うものだという。なぎ倒し、捕えると大きな五位駕であった。	城下町外
22	『拾権雑話』巻二十四の四九	勢村	高橋長者		上代勢村の高橋長者という富家が小浜の富人と参会した。その中に海邊の人おり、誘われ舟に乗ると、水中をくぐり行き知らない場所に着いた。居宅で炙り物を振る舞われたが、怪しみ喰べなかつた。この炙り物を高橋長者の娘が食べた。この娘は数百年を過ても老いず、八尾比丘尼といわれた。海邊の者は龍宮の人、炙物は人魚であったという。	城下町外
23	『拾権雑話』巻二十三の二	堅海坂		慶安四年	慶安四年、本境寺上人に化けた狸が堅海坂に出た。	
24	『拾権雑話』巻二十三の三	江戸	成田氏		家中成田氏が物語るに、その親江戸勤番の節に、夜に猫が手拭いをかぶり踊るところを見た。	城下町外
25	『拾権雑話』巻二十三の四	塩濱小路 西福寺	和久屋卯兵衛	寛永の頃	寛永の頃、塩濱小路和久屋卯兵衛が西福寺より夜分帰るところ、竹藪の内に狐を見た。急に驚かせば、狐は飛び去り骨の如きものを残した。	
26	『拾権雑話』巻二十三の五	西津	玄恵		西津の玄恵という医者が夜中に浦方で狐火を見た。狐を脅かすと、火を捨てて逃げた。これを拾い帰った。	
27	『拾権雑話』巻二十三の七	神明山	三代丹波屋宗兵衛 彌宣治部太夫		三代丹波屋宗兵衛が若い頃、神明山へ行き、彌宣治部太夫に化けた狐に化かされた。	城下町外
28	『拾権雑話』巻二十三の八	河内新右衛門		寛文の頃	寛文の頃、家中河内新右衛門が物語るに、狐が「高塚邊に釣し多し、若きものども多く釣られ、我も一日中にまわり申しべく大方得帰らぬ事と存じ、御暇乞申と請いに来たという。	
29	『拾権雑話』巻二十三の十	神宮寺 馬場	安達奎		家中安達奎殿のもとに夜な夜な狐が来て枕元で何か云う。病氣となり、神宮寺にて加持したが効果が無い。釣人を呼び馬場邊で狐を捕まえてもらった。日を追て病氣は回復した。	
30	『拾権雑話』巻二十三の十一	松原村			松原村の者いうに、羽織を脱ぎぬて稲荷社の鳥居を越え、其後羽織を着れば、人目に狐の形に見えるという。	城下町外
31	『拾権雑話』巻二十三の十四	鵜羽小路 甲ヶ崎	伊藤春琳		鵜羽小路に狐つきがいた。伊藤春琳という医師が狐を落とすため向かうと、その狐は甲崎より来た狐だと分かった。	
32	『拾権雑話』巻二十三の十五	青井			青井邊に住む老狐の名を四郎三郎という。方々でこの狐が憑く事があった。	
33	『拾権雑話』巻二十三の廿九		片岡三省		片岡三省に飼猫あり。猫の名をおへんたと言う。ある夜立ち踊るのを見た。	
34	『拾権雑話』巻二十三の卅一	町浦磯邊			町浦磯邊から蛇が出て海に入るとそのままが裂けて血だまりとなった。すると、たちまち鱗のかたちへと変わった。	
35	『拾権雑話』巻二十三の卅六	熊川 倉見 向笠村 前川村	藤五郎太夫		向笠村の藤五郎太夫が熊川から馬を引帰る所、倉見邊で狐が十五六斗の娘となるのを見た。娘に化けた狐に声をかけ馬に乗せた。前川村を過ぎた後、娘を柱に縛り付けると、尾を出して火を焼き、山へと駆け上った。其夜の四つ半頃、藤五郎太夫の苗代田へたくさんの狐が来て、苗代田を残らずこねまわした。	城下町外
36	『拾権雑話』巻二十三の卅七		奉行		ある時、奉行が夜半に山下の細道で牛鬼という異形を見かけた。	
37	『拾権雑話』巻二十三の四二	長源寺裏から浅ヶ瀬の間 川縁町 片原町	市右衛門		むかし長源寺裏から浅ヶ瀬の間に人を水中に引き釣りこむものがいた。死体の肛門は破られ、これは河童の仕業とされた。古老曰く正体は龜(すっぽん)であるという。或人川縁町通る際、大きな鱉が長源寺裏へ渡るのを見たという。片原町の市右衛門が語るに長源寺浦にて人を殺すものは鼈だという。	
38	『拾権雑話』巻二十五の六五	小濱 讃州	京都の人	延享元年四月	延享元年四月、京都の人が小濱で人魚の骨という物を見た。また讃州では、人魚の腕をみたという。	
39	『拾権雑話』巻二十七の十二	本行寺 津軽	圓信	元禄の頃	元禄の頃、本行寺に圓信という僧がいた。壮年の頃津軽へ行き、発心剃髪して津軽より仙臺地へと読経行脚していた。ある日野中にあった家に泊まると、庭で二三尺斗り燃え上がるあやしげな火を見た。	
40	『拾権雑話』追加武家の三	竹原二の堀北川橋詰 天神の森	守留嘉右衛門	元禄の頃	竹原二の堀北川橋詰の屋敷に元禄の頃守留嘉右衛門が住んだ。屋敷に古昔より覆の大木があった。廻り三抱半ばかり。殿さまの命令で伐採する際、恐れ僕み、落ちた葉も拾い集めて天神の森に持って行った。けれども障りがあり、伐ることができなかった。	

【注】

- (1) 福井県立図書館・郷土誌懇談会編『拾椎雑話・稚狭考』福井県立図書館、1954、198-199頁
- (2) 小浜市史編纂委員会『小浜市史 通史編上巻』、小浜市、1992、818-822頁
- (3) 杉原丈夫・松原信之編『越前若狭地誌叢書下巻』松見文庫、1973、10頁
- (4) 前掲 (1) 116頁
- (5) 前掲 (1) 17-19頁
- (6) また、本文内に「不思議」「奇妙」などと表現され、当時怪異と認識されていたと思われるものも掲載した。
- (7) 前掲 (2)
- (8) 南出真介「小浜」『城下町とその変貌』柳原書店、1983、116-121頁
- (9) 宮田登『妖怪の民俗学』岩波書店、1985、222-236頁
- (10) イーファー・トゥアン、山本浩訳『空間の経験—身体から都市へ』筑摩書房、1988などがあげらる。
- (11) 山野正彦「人文主義地理学」『最近の地理学』大明堂、1985、240頁
- (12) ①内田忠賢「江戸人の不思議の場所—その人文主義地理学的考察—」『史林』(73-6)、1990、115-142頁 ②佐々木高弘「伝説と共同体のメンタルマップ—徳島県美馬郡脇町の「首切れ馬」伝説を事例に」『地理学報』(28) 1992、129-143頁があげられる。
- (13) Jonathan Murdoch, post-structuralist geography a guide to relational space (ジョナサン・マードック『ポスト構造主義地理学 関係性の空間へのガイド』邦訳未完) sage, 2006, p.22
- (14) 同上 p.24
- (15) 同上
- (16) ブルーノ・ラトゥール『虚構の「近代」—科学人類学は警告する』新評論、2008、10-28頁
- (17) 前掲 (13) pp.131-132
- (18) 藤岡謙二郎「城下町の地理的性格に関する二、三の考察」『人文地理』(3-5・6)、1952、34-49頁
- (19) 本論もタイトルに掲げている「都市プランニング」という語は、筆者が専門とする歴史地理学においては藤田元春が古代の条里制と城下町の関連を論じる中で「都市のプラン」として使用したことを初出とする。藤田元春「条里の影響と近世の地割」『尺度綜考』臨川書底、1971、350-363頁(初版万江書院、1929)
- (20) 矢守一彦『城下町のかたち』、筑摩書房、1988、3-84頁
- (21) ①関戸明子・奥土居尚「高崎城下の形成過程と地域構成」、『歴史地理学』(38-4)、1996、1-19頁 ②関戸明子・木部一幸「館林城下町の歴史的変遷と地域構成」、『歴史地理学』(40-4)、1998、19-38頁 ③川名禎「分散城下町の成立とその統合原理—下総国関宿城下町の復原を通じて—」、『歴史地理学』(50-5)、2008、23-42頁などが挙げられる。
- (22) 武藤直「歴史地理学における封建都市研究」『講座・日本の封建都市』(第一巻総説篇1)、文一総合出版、1982、353-354頁
- (23) 「祇園牛頭天王延喜」『京都大学蔵むろまちものがたり』第四巻 臨川書店、1990、214-215頁
- (24) 福田アジオ他編『日本民俗大辞典 上』吉川弘文館、1999、452頁
- (25) 『令義解校本』(故實叢書3巻)、明治図出版、1993、234頁
- (26) 黒板勝美編『延暦交替式・貞観交替式・延喜交替式・延喜式』(国史大系第26巻) 吉川弘文館、1965年、171頁
- (27) 垂水稔「結界について(1)—日本的境界表示装置—」『国立民族博物研究報告』(3-1)、1978、63-94頁
- (28) 佐々木高弘『神話の風景』古今書院、2014、196-197頁
- (29) 虎尾俊哉『延喜式中』集英社、2007、376頁
- (30) 青木和夫他校『続日本紀二 新日本古典文学大系13』岩波書店、1990、293頁
- (31) 宮田登『ケガレの民俗誌』人文書院、1996、218-220頁
- (32) 黒板勝美編『日本三代實録 前篇』吉川弘文館、1971、105頁
- (33) 同上 314頁
- (34) 水原一『平家物語 上』新潮社、1979、366-370頁

- (35) 高橋昌明『酒呑童子の誕生』中央公論社、2005、47頁
- (36) 水原一校注『平家物語 下』、新潮社、1981、275-279頁
- (37) 三浦圭一「中世における畿内の位置—渡辺惣官職を素材として」『ヒストリア』(39・40)、1965、42-61頁
- (38) 前掲(35) 44-45頁
- (39) 同上 41-48頁
- (40) 野口実「撰閲時代の滝口」『中世の社会と武力』吉川弘文館、1994
- (41) 前掲(35) 46-47頁
- (42) 小西瑞恵「撰津渡辺党と山城榎島氏・伯氏—中世の武士論についての覚え書き—」『大阪樟蔭女子大学論集』(42)、2005、53頁
- (43) 佐々木高弘『生命としての景観—彼はなぜここで妖怪を見たのか』、せりか書房、2019、139頁
- (44) 前掲(28) 206頁
- (45) ①加藤政洋「郷土教育と地理歴史唱歌」『郷土—表象と実践—』「郷土」研究会、2003、26-44頁②長尾洋子『越中おわら風の盆の空間誌』ミネルヴァ書房、2019、18-20頁などがあげられる。
- (46) 前掲(43) 100-149頁
- (47) 八幡宮宮司渡辺隆氏より聞き取り。
- (48) 八幡宮分家闇見神社渡辺義幸氏より聞き取り。
- (49) 前掲(1) 198頁
- (50) 前掲(24) 714頁
- (51) 福井県若狭歴史博物館編『うきたつ人々～幕末若狭の祭礼・風俗・世相～』福井県立若狭歴史博物館、2018、38頁
- (52) 福井県神社庁『御大典記念福井県神社誌』福井県神社庁、1994、350頁
- (53) 杉原丈夫編『越前若狭の伝説』松見文庫、1970、688頁
- (54) 福田アジオ他編『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館、2000、732頁
- (55) 島津盛太郎編『福井縣神社誌』福井縣神社會、1936、339頁
- (56) 舟山直治・村上孝一・尾曲香織・竹田聡「滋賀県、福井県、石川県の川下、川裾、川澁信仰の伝承」『北海道博物館研究紀要』(3)、2018、179-192頁
- (57) 山本佳奈「臨時の相撲儀礼：童・瀧口・蔵人所衆の相撲」『史人』(7)、2018、119-138頁
- (58) 前掲(1) 119-120頁
- (59) 同上 571頁
- (60) 人文地理学は、他の研究分野の影響を受けながら発展してきた学問である。近年では他の研究分野においても空間的な側面が重視され始めており、それらの影響を地理学は常に受けてきた。ここで参照するフーコーの議論もそのひとつといえよう。
- (61) ミシェル・フーコー、田村俣訳『監獄の誕生』新潮社、1977、202-206頁
- (62) 同上 204頁
- (63) 前掲(13) p.103
- (64) 同上 p.40
- (65) 同上 p.27
- (66) 同上 p.103
- (67) 前掲(35) 210-247頁
- (68) 同上 148-152頁
- (69) 阿部正己『出羽三山史』郁文堂書店、1973、12頁194年初版
- (70) 綾部史談会『丹波志何鹿郡之部』1986、53頁
- (71) 現地調査で確認。茨木姓を名乗る人たちの中には、茨木童子の末裔を名乗る家系もあった。
- (72) 高橋文太郎『山びとの人生』河出書房新社、2019、86-89頁
- (73) 木下浩『岡山の妖怪辞典—鬼・天狗・河童編—』日本文教出版、2015、31頁
- (74) 池上洵一『三国伝記 上』三弥井書店、1976、300-303頁
- (75) 畑中誠治・他『滋賀県の歴史』山川出版社、2010、96-99頁
- (76) 佐竹昭広『酒呑童子異聞』平凡社、1977、27-44頁
- (77) 駒敏郎・中川正文『近江の伝説』角川書店、1977、127頁
- (78) 前掲(35) 84-86頁
- (79) 同上 210-247頁
- (80) 池上洵一『修験の道—『三国伝記』の世界』以文社、1999、194-203頁
- (81) 丸山顕徳「伊吹弥三郎伝説の形成」『和田繁二郎博士古希記念 日本文学 伝統と現代』和

- 泉書院、1983、285～303頁
- (82) 近藤喜博「難波の渡辺党 上」『國學院雜誌』(62-5) 1961、21-34頁
- (83) 田中政三『近江源氏』(第3卷) 弘文堂書店、1982、485-487頁
- (84) 『高月の絵馬』高月町立観音の里歴史民俗資料館、1990
- (85) 星野重治「南北朝期における摂津国多田院と佐々木京極氏一分郡守護論(守護職分割論)の再検討を中心に」『上智史学』(48)、2003、61-92頁
- (86) 多賀町史編さん委員会『多賀町史』(上巻) 多賀町、1991、428-429頁
- (87) 伊吹町史編さん委員会『伊吹町史』(通史編上) 伊吹町、1997、633-634頁
- (88) 同上 631-635頁
- (89) 『関ヶ原町史』(通史編別巻) 関ヶ原町、1992、40-43頁
- (90) 前掲 (86)
- (91) 前掲 (13) p.50
- (92) 下中隆浩「中世港都市小浜の成立過程」『港湾にとまなう守護所・戦国樹城下町の総合的研究—北陸を中心に—』2008、74頁
- (93) 『福井県史 原始古代』(通史編1) 福井県、1993、582-586頁
- (94) 和田萃「夕占いと道饗祭—チマタにおけるマツリと祭祀—」『季刊日本学』(6)、1985、41-43頁
- (95) 上杉喜寿『山々のルーツ』安田書店、1980、335-336頁
- (96) 前掲 (52) 775頁
- (97) 堂谷憲勇、山口久三編『若州管内社寺由緒記』若狭地方文化財保護委員会、1958、105頁
- (98) 同上 121頁
- (99) 同上 122-123頁
- (100) 小浜市在住、50代、S氏より聞き取り。
- (101) 若狭町神谷在住、70代、T氏より聞き取り。
- (102) 前掲 (1) 342頁
- (103) 前掲 (13) p.48
- (104) 前掲 (43) 251-252頁
- (105) 角鹿尚計『現代語訳 眞雪草子』福井県観光営業部ブランド課、2012、17頁
- (106) 鈴木昭雄『福井県の伝説』鈴木昭雄、1973、16頁
- (107) 福井郷土研究会『南越民俗』(通巻10号) 南越民俗社、1939、31-32頁
- (108) 前掲 (55) 131-133頁
- (109) 杉原丈夫、松原信之『越前若狭地誌叢書 上巻』松見文庫、1971、422頁
- (110) 湊八幡神社社家嶋崎氏より聞き取り。
- (111) 前掲 (55) 62-64頁
- (112) 同上 137-138頁
- (113) 同上 129-130頁
- (114) 井上翼章他編『新訂越前国名蹟考』松見文庫、1980、308～309頁
- (115) 柳田国男「一つ目小僧その他」『柳田国男全集』(7) 筑摩書房、初出1934、426頁
- (116) 谷川健一『鍛冶屋の母』河出書房新社、2005、17-18頁
- (117) 小松和彦『神になった日本人』日本放送出版協会、2008、146-147頁
- (118) 井上頼寿『改訂 京都民俗志』平凡社、1968、297-298頁
- (119) 日本随筆大成編集部編『日本随筆大成第三期』(11巻) 吉川弘文館、1977、90頁
- (120) 村上春樹『平将門伝説』汲古書院、2001、226頁
- (121) フィル・ハバード他、山本正三他訳『現代人文地理学の理論と実践—世界を読み解く地理学的思考』明石書店、2018、192-193頁
- (122) 前掲 (13) p.103
- (123) 同上 p.40
- (124) 前掲 (93) 479-480頁
- (125) 『福井県史 中世』(通史編1)、福井県、1994、25-29頁
- (126) 『福井市史 古代・中世』(通史編1)、福井市、1997、621-860頁
- (127) 登谷伸宏「北庄城下町の空間構造について：織豊系城下町としての位置づけをめぐって」『建築史学』(69)、2017、7-14頁
- (128) 前掲 (13) p.145
- (129) 同上 p.28
- (130) 同上 p.105